

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和十三年八月廿日印刷納本 昭和十三年九月一日發行

淨

土

第四卷 第九號

九月號



◇仕奉後銃・久持忍堅◇

◎一圓の淨財・一年の慰問

君國のために身命を賭した白衣の勇士達は今や到る處に戦傷を癒し、病苦を養ふておられます。これ等の方々に心の糧として吾等が誇りとする、信仰の伴侶雑誌「淨土」を贈つて法味を愛樂して頂かうと思ひます。何卒この聖なる運動に速時參加して下さい。

病院
慰問

白衣の勇士に法味を捧げよ

◇全國陸海軍病院の全部へ毎月三十部乃至五十部の雑誌「淨土」を贈呈して白衣の勇士達に法味を捧げた
いと存じます。

◇御一人一圓の淨財を御喜捨下さい。一年間毎月雑誌が病院へ参ります。

◇毎月五千部は是非入用です。五千人の有志者が必要です。御奮發下さい。

◇個人でも、團體でも、亦金高が一圓以下でも結構です。兎も角この聖き運動に隨喜參加して下さい。

◇御送金は淨土宗務所事變部宛に！領收の證には宗報誌上に御芳名を掲載します。

◎一冊の淨土・一生の歡喜

東芝 京市 芝國 區地 淨土宗務所

振一 替五 口一 座一 東一 京番

！峰高最の書用教布！刊新

我が信仰

— 内容 —

往生	念佛	懺悔	本願	知恩院
郁芳隨圓	武者小路實篤	吉田絃二郎	佐藤春夫	岡本かの子

文壇の巨星が語る信仰の體驗！

四六判二色刷表紙付
定價六錢（送料三錢）
二十部以上一時に購入
の方には一部五錢とす。
法然上人鑽仰會編

この時代の信仰は？ 念佛の眞骨
頂は？ 法然上人は？ 文壇の巨星
が隨筆風に表現された、新鮮な信仰
の言葉は何人の胸にも法悦の燈びを
點ぜずにはおかない！

この内容、この定價！本書こそ布
教用書の最高峰を行くものである！

發行所・法然上人鑽仰會

振替東京芝公園四丁目一八番七
八番七
館會照明園公芝京東

表紙	井上正春
扉繪	鈴木金平

心の静かさとも名申すこと

倉田百三

迷心	中野尅子 (四)
----	----------

念佛部隊長の聲を聞く	白簾靈光 (三)
法然上人をめぐる人々	東慈道 (八)
濟ひへの道	篠原文雄 (六)

新渡戸博士とお茶師の話	篠原文雄 (六)
信仰相談	中村辨康 (三)

一頁評論・使用制限の話	木村義 (三)
支那時文釋義	西澤道寛 (五)





銃 後 の 守 り……………牟田口敏子（四）

支那奇談・山 寺 の 卷……………吉 水 靈 家（四）

山花合掌

吉田絃二郎

（三）

小 説 盜 人……………水島弘三（四）

時代 小説 千姫と出羽守……………今野賢三（四）

童 話 かつぽう鳥の話……………金 子 和（五）

俳 壇……………太田耳動子選（七）

歌 壇……………與謝野晶子選（三）

法 語 解 説 月 に 光 る 心……………中村辨康（三）

読者の聲……………（六）

編輯後記……………（六）

◇ 浄 土 第九卷 九月號 目次 ◇

東京帝國大學教授
文學博士

宇井伯壽監修

(最新刊)

實物全國書店にあり

コサイン 佛敎辭典

學界の一大明星！

語彙豊富、体裁

斬新、携帶至便、

而も至廉な辭典

の出現、從來數

十圓もした大辭

典以上の語彙を

もつ、此の辭典が

僅か四圓五十錢

で求められる。

監修者宇井博士は序に「決して名目のみの監修者ではない」と自ら責任を明にされてゐる。此のハチ切れる様な内容とスマー
トな體裁とは、敎界は勿論あらゆる方面の大驚異となる。

特價四圓五十錢

(送料十四錢)

特價期限八月末限り期限後
は絶対に定價に復す(定價五圓半錢)

◇語彙：二萬五千四百餘。佛敎辭典中の最高數を示す。

◇内容：簡結明快、専門家用通信俗用何れにも役立ち、

然も絶対に信賴し得る。

◇配列：語の配列は便利な音引で、恰も電話帖を索く様に簡單にひける。

◇体裁：革装コンサイス、堅五寸五分、横三寸、横組最新型美本。

發行所

大正大學教授 高瀬承嚴編 (最新刊)

佛敎國文讀本

古來より現代に至るあらゆる國文中より佛敎關係の名篇を抜粹したるもの。
斯様な讀本は今迄に無いだけに中學校女學校其他専門學校等各方面より副讀本用として申込も相當の數に達し個人の讀物としても非常に興味を以て求められてゐる

申込忽ち殺到！(定價二圓二八〇頁)
(定價一圓四十四錢送料十四錢)

常盤博士序 平井異著 定價二圓五十錢 送料十四錢

指導原理としての佛敎學

文學博士 宇野圓空著 定價一圓二十錢 送料十錢

佛敎が要求する宗教生活

加藤咄堂著 定價一圓二十錢 送料十二錢

佛敎とは何ぞや

大正大學敎授清水谷恭順著 定價一圓二十錢 送料十二錢

觀音經講話

發行所

大東出版社

東京市芝公園地七ノ十
振替東京一九四七一番

淨土

九月號

阿彌陀佛にそむる心の
色にいでは
秋の梢のたぐひならまし

法然上人詠歌





心の静かきと名申しと

倉田 百三

トルストイの晩年の生活を知つてゐる人々は、誰れでも彼が「爲すべきこと」と、「現にあること」との二つの法則の間に板挟みになつて、他所目にも氣の毒な程慘憺として苦しんだ姿に胸を打たれぬものはないであらう。

若し佛法の道、殊に淨土門の、二律背反を一如に載る道がないならば、合理的の道德的理想主義者は——正直な人は皆さうあるのが自然なのであるが——誰でもトルストイと同じ苦悶を経験しなければならぬであらう。

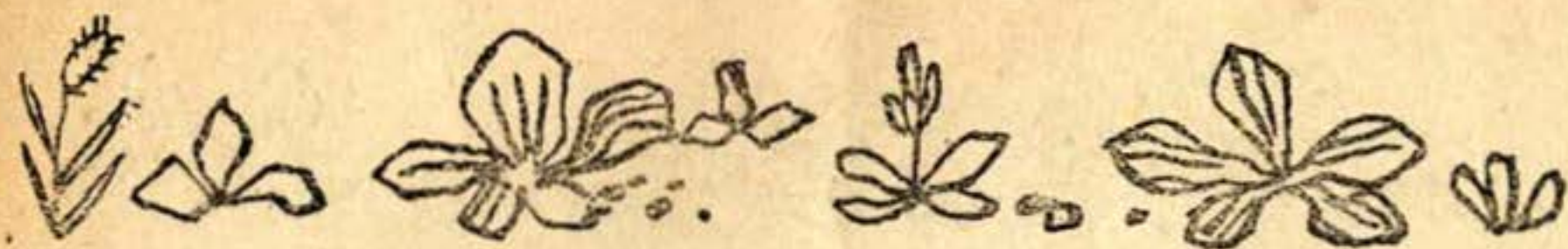
私もまさにその通りの道を経た一人なのである。

一方には即刻家出すべきであるといふ當爲の必然。又一方にはトルストイが青年學生に答へたやうに、呼吸がつまつていやでも咽喉元まで迫つて來たとき家出すべきだといふ動機充足の必然性。これは矛盾だ。

偽るなかれといふ聖書の教へのままの實行と、夫人に内緒に、印税を貧乏人に與へる契約書を書店と森の中で作製する事、これも矛盾だ。

それどころか契約書そのものがすでに「誓ふなかれ」といふ教へに反する。トルストイは、誰れでも知つてゐるやうに、「誓ふ勿れ」といふ教へを重んじ、「闇に輝く光」といふ戯曲では、主人公に裁判所での宣誓を拒否させてゐる位である。

トルストイの晩年のすべての行爲は慘めに二つに引き裂かれた。そして二つとも強き動機力で彼に迫つた。彼のやうな藝



術家には、愛と、慾望と、情意とが人間の生活と行爲とにどんなに活きた強制力を持つものか解り過ぎて居るのだ。

それがないと作品の中の人物が死んでしまふからだ。倫理的の當爲だけで動く人物は讀者の同感を引かない。現にトルス

トイの傑作アンナ・カレンナは姦通を描いてあるのに、惻々たる同情がアンナ夫人にあつまるではないか。同じ彼のクロイツェル・ソナタは嫉妬を描いてもこれも人間らしい交感を生じる。その消息を知らぬトルストイではない。

だから彼は勿論カントの當爲主義に對するシルレルの批難には多分の同感を持つてゐたに相違ない。

「何々すべきである」といふ道德的義務感でなくて、自づとしたい心あふれてした善行でなくてはつまらないといふシルレルの主張は、「美しいたましひ」からの行ひとして、トルストイに共鳴しない筈はないのだ。

けれどもトルストイはそれだけで満足出来ないものがあつた。彼は人間の惡の動機の恐ろしさを知つてゐた。そしてその惡が他人の運命を傷けて、取り返し付かない不幸を與へる事實に、もつと痛切な、リアリスチックな心配と嚴肅感を持つてゐた。シルレルよりも、トルストイの方が實踐的に眞面目であると私は思ふ。トルストイはシルレルのやうに美的に、ロマンチックの方面からばかり考へられず、もつと地について、眞面目に、實際的に考へた。

水害の罹災民に金を送ることと、ビールを飲むことを、動機力の強さで選べば、大概の場合ビールが飲みたいに決つてゐる。己れに打ち克たねば義捐金は送れるものでない。

人妻に心惹かれるからと云つて、それは不倫であるとして抑制しなかつたら、貞操は破られてしまふ。道德には確かに義務乃至當爲の意識の側面が重大なのである。

併しそれだからと云つて、義務、當爲の意識だけでは美的、感情的の力、活きた行ひにならない。

それは死んだ行ひになつて、見ても苦しく、又結果もあがらない。よろこびもない。

本當の子と義理の子との母親の愛の活き死を見れば解る。戀人といやな人への態度を見れば恐ろしい程趣きが違ふのだ。敵愾心のない對手とは本當には戦へない。

よろこびの無い、おつとめの行爲ばかりで暮らすなら生活は地獄だ。少くとも砂漠だ。



又さうした行爲は結果があがらぬ。自發の行ひとはお話しにならない程相違するのだ。愛はこしらへられるものではない。心にも無い、他所行きの善行をしても、長くは續かず、後で恩知らずだと思つたり、損をしたとこぼしたりして、鍔金つばきんが刺さけることが多い。苦々しい後味が残つていさぎよくない。

小慈小悲も無き身にて利益衆生は願ふまじ

といふやうな自己反省が沁々と生じるのだ。

この二つの矛盾した動機に挟まつて、晩年のトルストイは苦しみもがき、日夜心を苦しめ、いら立ち、あせり、他所目に氣がくさり、鉛の板のつかへてるやうな、我慢出来ぬ程窮乏な世界を生きねばならなかつたのだ。

法然上人の「念佛の申されん方に過ぐべし」といふ心境が若しトルストイに解つてゐたら、どんなに彼は助つたであらう。彼は恐らく飛び付いたであらう。

彼は聖書でなく、一枚起請文や、歎異鈔を見ればよかつたのだ。

彼は確かに、どうにもかうにも動きのつかぬ大疑團にぶつかり、行きつまつてゐた。それは法然上人が濃信の往生要集を見る前の行きづまりにゐたのだ。

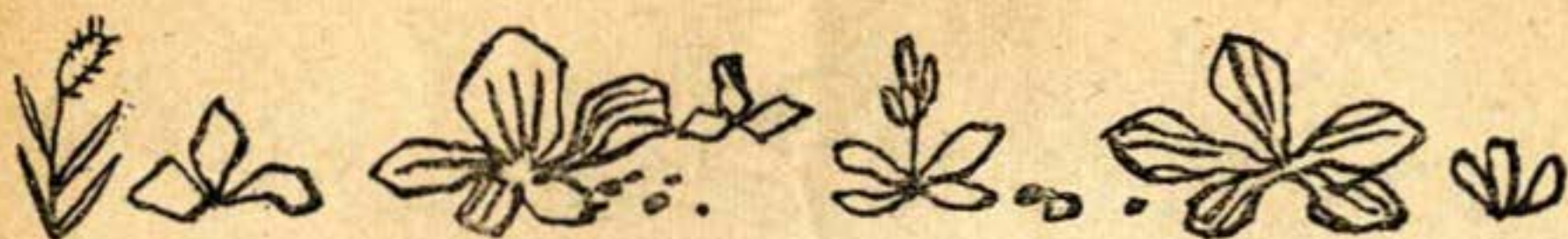
「彼の佛の願に順ふの故に」

の大轉向、自力の極點から他力の易行道に目のひらかれる所に來てゐたのに、痛ましくも、念佛の眞意に觸れずに死んでしまつた。

たくましい自力精進の勇猛心で傷きたふれたのだ。

念佛申す心は、當爲と自發とも一如に止揚した心境なのだ。「すべき」でもなく、「したい」でもなく、又、そのどちらでもあるやうな、行爲の決め方なのだ。

念佛申さるるやうに、善かれ、悪かれでなく、ただ沁々と念佛申されるやうに行爲するのである。善惡で決めず、理窟で決めず、ひたすら念佛で決めるのである。



「此の世の渡りざまは念佛の申されん方に過ぐべし。」
 沁々と念佛の申されなくなるやうな行爲は、此の世の掟や、また理窟の上で、たとひ善くても、又悪くても、しないのである。

それは淨土の信仰から見てもどちらもわるいのだから。
 法然上人の御歌に、

みだぶつと云ふより外は津の國の

なにはのこともあしかりぬべし

といふのがある。

深く／＼味ふべき心境である。

「念佛にまさる善なきが故に」

と法然の後繼者と自ら名乗つた親鸞は云つた。

淨土の信仰はここまで來ねばならぬのだ。さうでなくては「なまじつか」である。

トルストイは茲まで來べきであつた。此の世の善惡、理窟の正、不正を超えることが出來なかつた。

み名申す心の最勝義に、無義の義に目ざめることが出來ずに死んだ。

み名申す心になつて、初めて善惡の葛藤から脱した靜かな心になれるのである。

いはゆる「兩箇の泥牛争ひつつ海に没し」た後の、靜謐があるのである。

だから法然上人のかうしたところは、他の方面から見ても窺はれる。

「念佛申す時妄念が群がり起つて困りますがどうしたらよろしうございましょうか」

と訊いた者に對しては、

「妄念はそのまゝにしてただ念佛申すがいい」



と教へられた。

又、唱名中に睡氣が催して、うと／＼して困りますと、思ひ切つて本音を吐いた在家の者に向つては、

「目のさめたらんほどはみ名唱へ給ふべし」

とアドヴァイスされた。

これはどうしたわけであらうか。

思ふに、自己を鞭打つて、妄念を去らんとし、強ひて睡魔とたたかつて唱名する心境そのものが、「静かさ」のない、苦しげな、自力の姿だからである。心はかくすることによつて、歪み、肩を張り、力味返り、苦しみもがく。それはみ名申さるる心境とすでにムードに於て相違するのである。

かく自力を囿んで、その力で救はれるのでもないのに、さうした心境はひとへにみ佛の力にたのんでゐる心ばえと違ふからである。

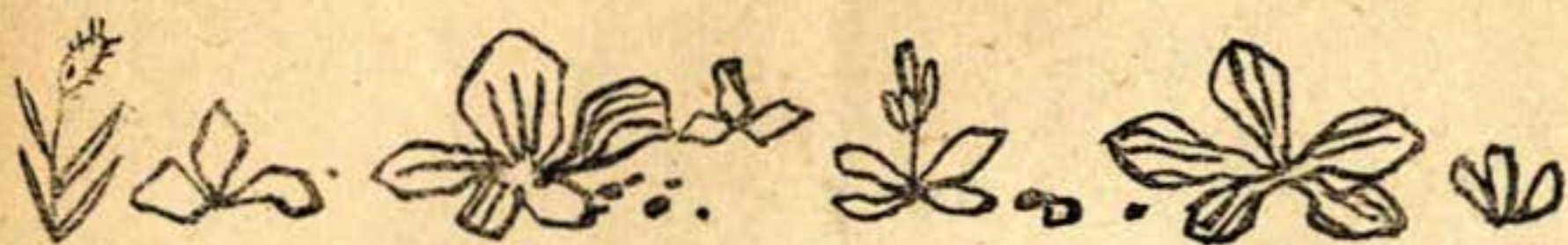
ここにただの苦しみもがく精進と違ふ他力の姿がある。しかしさればとて唱名しないで懈怠していいといふのではない。覺めたらん程は唱へるのである。その人の機が許す限り唱へるよりない。それ以上唱へさせようとしても無理なのである。

其處に自然法爾といふものの姿、そして智慧とがある。

心が静かでなく、無理や、客氣で亂れてゐるとき、さうした心境からいい、賢い、ふさはしい行爲が生じる筈がないのである。硬くなり、いら立ち、苦しい時、誰れがやさしく、忍耐深く、機嫌よく他人に對することが出来よう。事態への適正な判斷乃至反應が出来よう。

犬でさへも、主人がさうした心境に居ると感づくと、近付いて來ないのである。

それはさうした時の主人が、氣六ヶしく、短氣で、氣むらで、恐らく慈悲深くないことを知つてゐるからである。訥々とみ名の申されるやうな心境に居る時、その人の器量の許す限りでは、最も適正な、時宜にあてはまる、賢い判斷や



「爲が出来るのである。

一つ一つの善い行ひや、判断をでなく、一つ一つのさうしたものを發現出来るやうな、一般的ないい心の有様にあらしめようとするのが、淨土宗の方法論なのである。

草のいほに寝てもさめても申すこそ

南無阿彌陀佛なむあみだぶつ

良寛の心もさうであつたらしい。

倫理學の理論も、世の中の戒律も煩はしくて、ひつかかり、無理があつて、いさぎよくない。さうした不淨なものではなく眞に清淨なものは、ひとへにただみ佛のみ名の申さるる時の心境である。

まことに泥の中にあつて淨らかなる蓮の花のやうに、世の習俗、學問の葛藤の塵勞の中にあつて、靜かにして、淨らかに自ら足りて無碍なるものはみ佛のみ名申さるる心の姿である。

(一九三八・八・七)

法爾の道理と云事あり。ほのほは空にのぼり、水はくだりさまにながる。菓子の中にすき物ありあまき物あり、これらはみな法爾の道理なり。阿彌陀佛の本願は、名號をもて罪惡の衆生をみちびかんとちかひ給ひたれば、ただ一向に念佛だに申せば、佛の來迎は法爾の道理にてうたがひなし。

法然上人法語



法然上人を

めぐる人々



救ひへの道

九條兼實の一生

東 慈 道

法然と兼實

世の中はどのようなのか、豫想さへ出来なかつた源平相剋の濁亂時代にあつて、貴賤貧富を超えた人間そのものを深く凝視めて、その正しい生き方を説き明かしたのが法然上人であつた。上人の庵を訪れる求道者が、上は朝廷のやんごとなき御方より、下は名もなき庶民にまで及んだのも當然であらう。

この色とりどりの求道者——上人をめぐる人々の中で、一きは鮮かに浮び出て来る人物は九條兼實公である。當時隨一の名門の出身で、位人臣を極めた兼實公が、烏帽子も着ざる黒衣の平民僧法然に心から歸依した對照の妙もさる事ながら、兩人の親交は殊の外深くはたの見る目も羨ましい程であつたから。

人となり

兼實は並ぶものなき名門、藤原忠通公の三男として生を享け、近衛天皇の御宇、久安五年に誕生した。十四歳の時には既に正二位、父が薨去した十六歳の時には内大臣に任ぜられた。しかも名門の出身とは云へ天性伶俐にして政治的手腕にも長けてゐた。平家が滅びた後、時局收拾の大立物として、源頼朝と東西に呼應して起ち、攝政、太政大臣、關白と要職に歴任

し、廟堂の樞機に参畫してゐる。また教養も頗る高く、文才にも秀でゐた。蓋し傑出した當代一流の大人物であつた。

兼實の生涯は決して數寄に富むものではなかつた。然し彼が生きた時代は、公卿に代つて武家が新らたに政權を握らうとした轉換時代であり、従つて様々な勢力がせめぎ合ひ、今日あつて明日知れぬ無常迅速たゞならぬ時世であつた。公卿である彼は自滅し行く公卿の姿にたち難き愛着と憂愁深き焦燥とを感じずにはをられなかつた。

時世の目まぐるしい變轉はかくして彼の心に憂悶の影を宿し始めた。然し時世の混亂は日と共に深まるばかりである。王法も佛法も破滅の末法澆季の世が現前せられて行く。混亂の歸趣は見透しも出来ない。時代を指導すべき立場にあり、自壞の道を辿る藤原一門の行末を案じる彼にとつては、時世の變轉は大きな壓力に感じられた。

名門に生れ何一つ不自由な生活をしなかつた彼が、時代の大きな動きにまきこまれて、日

ごとに苦悶と焦燥にかりたてられて行つた。

いらだち

彼の日記「玉葉」を披くと、憂ひといらだちの告白が至る所にしるされてゐる。

安元元年（法然上人が淨土宗を開かれた年である）には

「閏九月九日丁巳、太白金中央天皇を犯す、天子宮内賊亂れ、天子大勝し大將を戮す、國に大喪有り、一年を出でずして大兵有り」と不安な世相を占星によつて豫言してゐる。

人知では計量し得ない激變の時世であつた。自己の眼を疑ひ、自己の知に信頼をもてない時代であつた。榮位も學問も何のたしにもならなかつた。いらだてる兼實が自信を喪つて占星や祈禱に自慰の道を見出したのも無理からぬ事であつた。

翌安元二年には皇室には御不幸が續き、六月十三日には高松院の御崩御、次いで七月八日には建禮門院、更に同十七日には六條上皇の御登遐あり、兼實の豫言は一々適中して來

た。

安元三年四月十三日には山法師の嘯訴事件があり人心恐々たる處に、この天罰か、四月二十八日には京洛の大半を灰燼に歸した大火災が起つた。内裏も炎上した。

「火災、盜賊、大衆兵亂、上下騒動、緇素奔走、誠にこれ亂世の至なり、人力の及ぶ所に非ず」と慨歎してゐるが、五月一日には

「強盜數人宮中に亂入し、雜物等悉く盜取し了り、：又火を放つ、禁中騒動、上下周章、陣中の強盜古來未だ聞かず、：天運盡きんと欲する歟、悲泣しても餘りあり、：我國滅亡の時至れる歟、余亂世に生れたる宿業を取づるのみ」と號泣せん許りに訴へてゐる。亂世に次ぐに天災、目を掩はしめる慘狀である。

この亂世の中に政權は藤原氏から平氏、平氏から源氏へと瞬く間に移つた。平清盛が藤原氏を驅逐して實權を握り、平氏に非ざれば人に非ずと豪語し、專横の限りを盡したの

も束の間であつた。清盛は平氏の勢力の衰へ行くさ中、養和元年に、名も知れざる奇病で歿した。

「修因因果の理を案するに敵軍の爲に其身を亡ぼし首を戈鋒に懸けられ、骸を戦場に曝すべき筈なるに、弓矢刀劍の難を免れ病席に命を終りしは誠に宿運の貴き爲めか、人意の測る所に非ず。但し神罰冥罰の條新に以て知るべし、日月地に墮ちず、爰に憑みある歟」と兼實は清盛の死を痛激してゐる。藤原氏をたゞきのめし目にあまる横暴を敢てした清盛であつてみれば、兼實にとつて彼の死は胸のすく思ひがしたであらう。

得意の時代

清盛の死は平氏の滅亡を早めた。統領を失つた而も専横になれた平氏は所詮關東のむくつけき源氏の敵ではなかつた。一ノ谷、屋島と急迫せられ、遂に元暦二年三月二十四日、壇ノ浦の海底深く葬りさられてしまつた。

時世は一轉換した。源頼朝が新らしい時

代の統率者として登場して來た。然し頼朝は實力はあつても一介の田舎武士に過ぎない。公卿の統領である兼實の力を借りねば、天下の實權を掌握し得ない事をよく知つてゐた。また兼實は頼朝の勢力なくしては、自己一門の勢力を挽回する事は出来なかつた。

かくて兼實と頼朝は協力して、東西に相應じて新時代草創の道を開拓し始めた。頼朝が實權を握るや、政府は面目を一新した。兼實は攝政に任ぜられた。文治二年の春、三十八歳の男ざかりであつた。

逆境に喘いでゐた兼實にもやつと春が來た。こえて文治五年十二月六日には太政大臣となり、建久二年十二月十七日には關白に任ぜられた。そして彼が法然上人と相識るに至つたのは實にこの得意の時代であつた。

法然上人を識る

疾風狂亂の時代の怒濤は榮位も門地も教養も一切の傳統を呑み盡しおし流してしまつた。名門に生き教養に培れた兼實は、それ

だけ時代の動きが慘酷に感じられた。今迄誇りとしたものが、かへつて邪魔物に思はれた。轉變極りなき時世には自己の教養も門地も何の役にもたゝない。たゞ／＼自己の力が、自己の教養が餘りに頼りなきものに感じられるのみであつた。

自己の教養に自己の知識に疑を抱いた兼實が、極端な非合理の世界に沈湎して、占星や祈禱に墮したのも當然であらう。滅び行く自己並に一門の姿に焦燥を感じつゝも、どうする事も出来ず、占星や祈禱によつて行末を卜しては、自ら慰めるより外にいゝ術とてはなかつた。然し祈禱と云ひ占星と云ひ、自己の功利を中心とした當座の氣休めではないか。教はれる事がどうして出来よう。兼實のいらだちは日毎につのつて行つた。

彼のこの重くるしい心境を一轉さしたのは時代の轉換であつた。新らしい時代の息吹きが聞え始めた。彼は頼朝と共に來るべき時代の擔手として復活した。新時代の脚光をあびて彼はやつと自信をとり戻した。そして世間

の事情を落ちついて眺めるだけの餘裕を持つ事が出来た。

この時、彼の耳に最も強く響いたのは、聖法然上人の名であつた。

法然の説く浄土の法門は新しい時代の宗教として、上下貴賤を問はず熱烈な尊信を受けてゐた。念佛の聲は朗朗と京洛の巷に飡してゐた。しかも彼自身にとつては法然上人の名は懐しいものでもあつた。保元三年、彼の父關白藤原忠通が法然上人を始め當代の學匠を集めて往生要集を講ぜしめた事があつたが、上人の講説がきはだつて勝れてゐたので、その場で「智慧第一」の譽を得たと云ふ因縁深き方であつたからである。

文治五年の八月一日、兼實は意を決して、上人を自分の邸に特請して法文を聴聞した。時に上人は五十七歳、彼は四十一歳であつた。

上人への傾倒



彼の苦しみ通した胸に思ひがけない光を照らした。

上人の法話を聞いて彼は實際ビツクリした。深い自己反省から生れ、人間性の弱さを

洞察した上に築かれた上人の宗教的體驗は、

凡人凡情のあさましさに泣く人間の救ひ難い事實を、上人は一々ハツキリと示した。深い罪惡に汚されてゐる人間にとつて、かばかりの修行が何であらう。どんなに學問をしたとて、擲劫の彼方より生死に流轉して來た人間の煩惱を斷絶する事が出來ようか。人間の知識には、人間の行には限りがある。この煩惱にもだへる人間を救ひとる道は一つしかないわけだ。遠い昔にこのたち難い煩惱を斷つて、人間救済の大誓願をたて、佛となられた阿彌陀佛を信ずるより外に、人間の救はれる道はないのだ。阿彌陀佛の大願業力におすがり申して、南無阿彌陀佛と唱へる處にのみ、人間の救はれる、人間の安住し得る道が開けてくるのだ。

兼實は上人の法話の言々句々が胸にこたへ

た。人間がどんなに弱い者であるかは身悶へして體驗した彼であつた。凡人凡情のあさましきには身を以て泣いて來た彼であつた。その凡愚の安住し得る道が上人によつて提示されたのである。兼實は泣かん許りに喜んだ。一度の法話で身も心も上人に捧げる熱烈な念佛信者となつた。七日後には上人によつて授戒した程であつた。

これから上人と兼實との特別な親交が始められた。建久七年には月輪殿を造營したが、この時上人の爲に特に別室を作つて上人をお迎へ申した。建久九年には、上人の有難い法門を後世に傳へる著作の少きを憂へて、特に懇望して選擇本願念佛集を撰述せしめた。そして遂に建仁二年正月二十八日には、上人に就て出家し、名も圓證と改めるに至つた。

上人との別離

建久七年十一月には政界のうるさい事情が嫌になつて、關白を辭し政界を引退してしまつた。そして俗塵をたつて安らかな念佛生活

に入つた。悠々自適、信仰の生活を樂しみ續けた。

然し晩年再び兼實は憂愁に身もだへせねばならなかつた。それは愛息京極攝政良經の逝去と法然上人の御流罪とであつた。世間、出世間の光明を一時に失つた兼實の悲痛はあれそのものであつた。

南都北嶺の讒訴によつて御流罪を命ぜられた後鳥羽上皇は、彼が右大臣の時に親しくお育てまゐらせた君であつた。奔命以て上人御赦免の運動を起したが、今は世變り失脚せる身である。結局功を奏する事の出來ない不甲斐なさをかこつのみであつた。止むを得ず老齡の上人は自分の領士の讒岐にお止め申し、土佐には弟子の一人を送るよりに奔走するよりしかたがなかつた。

悲歎にくれた兼實は出立の日に一日猶豫を請ひ奉り、自分の法性寺の御堂に泊め參らせて、しばしの名残を惜しんだ。然しこれが今生の別れにならうとは思はなかつた。

上人は出立せられた。鳥羽の南門に一行が着いた時、飛脚が「土佐の國は餘りにも邊土である。幸ひ讒岐の國は私の領土でありますから、其處に暫くお止まり下され」との兼實の手紙を齎した。その奥には

「ふりすてゝゆくは別れのはしなれど

ふみわたすべきことをしそおもふ」

と悲痛な惜別の歌さへしるしてあつた。

「露の身はこゝかしこにてきえぬとも

こゝろはおなし花のうてなぞ」

と上人は眞心こめた慰めの返歌をしたゝめてこれに應へられた。

愛兒を失ひ、また再び心の師上人と別れた後の兼實は見るも淋しい限りであつた。想ひを法然上人の上にかけてめぐらし、憂悶の日を送つてゐたが、心痛が禍ひしてか病床に臥し、上人が都を立たれて二十日と經たない四月五日に、五十八歳を一期として往生した。往生の際まで上人の事を心配して、轡中納言光親卿に上人赦免の事を頼んだのであつた。

使用制限の話

一國民が必要とする物資は、その國民の文化の進んだ程度にもよる、またその時代の特別な性質にもよるのである。平和な時代にはその時代の文化的生活に適當した物資の一定數量が必要だし、また戦時には戦争に必要なだけの軍需品が必要になつてくるのは當然である。殊に近代戦の特徴は消耗戦とも云はれる位、戦争に勝つためには、昔の戦争とは比較にならない程大なる物資の消耗を覺悟しなければならぬのである。

ところで、これらの平和、戦時の

物資を造り出す生産力とは生産設備、原料、労働力の働いた全體を云ふのだから、一國民の物資生

産力は全體一定してをり、年々、月々の生産數量もほゞ一定してゐるものであつて、餘程うまい條件に恵まれないうりは、そう急に全部を一時に増大出来るものではない。

然るに戦争が始まれば、當然、軍需品の生産は、さきに云つた消耗戦の必要から、急速に増大させなければならぬのであるが、さうするには、全體限りのある一國の生産力であるから、どうしても平和産業の生産力の一部を犠牲にしてもこれを軍需品産業に振向けてその増大を計ることが先づ必要となつてくる。すると民需品の生産力は減少する。

ところで、戦争は平常の何倍もの金屬、燃料その他を要求するがこれらは平常でも輸入に仰がねばならない部門が多いのだから、戦争の要求をみたすためにはその輸入數量は急激に膨脹することに

なる。それなのに、民需のための輸入をそのまゝにしておくと、輸入總額は急に増加して、輸出との均衡が破れてしまふ。つまり莫大な輸入超過、國際收支の悪化となり、金の保有量が貧弱だと爲替關係に悪影響を及ぼすことになる。萬一そう云ふことになれば、國際收支の變調は急歩調に進む心配があるで、この國際收支の悪化を防ぐために輸出入の均衡を計ること、つまり民需品の輸入は出来るだけ抑へ、一方輸出を増加させて、兩者の帳尻を合はせるやうにしなければならぬ。この方面から物資の不足が現はれる。

前述の兩方面から来る民間物資の供給不足はそれだけでも物價騰貴の原因となるが、更に何十億かの公債が日銀の引受けで紙幣となつて軍需品工業その他から市場へ出てくると、需要と供給は甚だ不均衡なものとなるから、物價騰貴に拍車をかけることになる。

かゝる物價騰貴は國民生活に影響を與へるばかりでなく、國際收支への悪影響は物資の輸出入關係を益々不均衡にし、目的の速かな達成の障害となるおそれがある。かゝる障害に出逢はぬ様、速かに戦果を達成するために膨脹した通貨による需要を抑制し、且つ抑制された供給に需要を適合させること、即ち使用を制限すること、買はせぬこと、買はぬことが絶対に必要なのである。また金の日銀保有高を増加せしむることも前述のことからその必要なことが明かである。無駄をはぶくこと、埋れた物資を政府に提供することなどは前述の事柄から来る當然の結論であつて、これらを行つたためには、嚴格な統制による國民生活の大改革は勿論國民の大覺悟が絶對的条件である。



盜^{ぬす}

人^{ひと}

水島弘三
鈴木金平畫

『こんなことつてあるかしら！』

三谷奈美江はたうとう我が家の玄関先の石段に腰を下してしまつた。一時間も前に彼女の乗つて來たタクシーの運転手が運んでくれた大きな旅行鞆をぼんやり見下しながら獨言を云つてゐるのだ。

『咲は従妹のところへ行つたに違ひないわ』

が、留守居の下女の咲が従妹を訪ねて行つたとしても苦情は云へない。と云ふのは三谷一家の避暑の留守中に一晚位なら、町にゐる従妹のところへ泊りがけで遊びに行つても良いと云ふ許しが三谷夫人から出てゐるからである。それにしても、今日と云ふ日を選ばなくても良ささうなものを。鍵は全部咲が持つてゐるのだし、家は確り戸締りが出来てゐる。これでは手の付けようがない。

奈美江は何度も玄関のドアの取手を廻して見たが無駄だつた。窓から這入らうにも、どの窓も高過ぎてとても及ばなかつた。

我が家には着いたものゝ、それからかれこれ一時間も経つて、もう六時にもならうと云ふのに、どうにも家の中へ入る手掛りが無いのである。咲の従妹の家へ電話をかければどうにかなるかも知れないのだが、この近所で電話のあるのは正木まり江さんの家だけ、が、そこ迄は道程も遠いし、それに正木さんの一家も家を締めて避暑に行つてしまつてゐるかも知れない。だが、こゝから町までは半道もあるし、こんな大きな旅行鞆を抱へた上に、ハンドバックの中には父から託された大事な品物が入つてゐる。彼女はハンドバッグを抱きしめて、父の

云ひ付けを胸の中で繰返して見た。そして

『正木のまり江さんが、うまく家にゐてくれると良いが……』とつぶやいた。

奈美江の家三谷家はW地方きつての舊家であつた。この地方の有力事業には大概この一族のものが名前を連ねてゐる。奈美江の祖父は醫者を開業する傍ら銀行家としても聞えてゐた。父親は東京の大學を出て辯護士の肩書をとると、W市で法律事務所を開いて、同時に祖父の仕事を引き繼いで金融方面でも羽振りを利かしてゐた。W市に『三谷豊太郎法律事務所』と云ふ金看板の堂々たる事務所を持つてゐて、仕事は大抵そこでやつてゐた。

三谷氏が父の死後その資産と一緒に住古した大きな屋敷を受繼いだのだが、郊外のずつと外れに人里離れてたつた一軒建てられてあつたその古風な屋敷を、彼は思ひ切つて取壊して、すつかり近代風な洋館と建代へてしまつたのであつた。それは東京仕込みの三谷氏の新しがつたやり方にもよるが、同じ土地の舊家で、奈美江とは學校友達のまり江の父、正木氏が新築した洋館に對抗した譯でもあつたらう。

奈美江はこの人里離れた大きな屋敷の中で時々孤獨感に襲はれるのだつたが、その淋しさを今日程感じたことは無かつた。かうなれば歩いて町に歸るより外に仕様がな。街道を下つて町離れの旅館で一夜を明すか、それとも父親の仕事仲間の原田さんのところへでも厄介に

なるのだが、現金で壹萬圓と云ふ大金を抱へて旅館へ泊るのは考へも
のだ。また原田さんの家は町の反対側で少し遠過ぎる。

『何んとかうまい工夫はないかしら？』

彼女が父親から云ひ付かつた用事と云ふのは、明日の朝銀行へ行つ
て、壹萬圓の小切手を現金に換へて貰ひ、それを父親の許まで届けろ
と云ふのである。

實は父が今日町での仕事と炎熱からやつと脱れて三谷家の別荘に着
いて、一くつろぎしたばかりの處へ、R市の知人から或る商談が急に
纏まりさうだと云ふ電話を受取つて、早速そつちへ出向かなければな
らなくなつたのだが、その商談を纏めるには現金で壹萬圓の保證が是
非共必要なので、自分が一足先きにR市に赴いて話をつけてゐる間
に、別に誰かに、R市にある彼の處へ現金を届けさせると云ふのが一
番手順のよい遣り方なのである。ところが、信用のおけるものと云つ
ては、三谷夫人は湯殿で滑つて挫いた足が未だに治らないので使ひな
ぞには出られないし、奈美江の兄の豊夫は山登りに行つてしまつてゐ
る。途方に暮れてゐるところへ、ひよつくり奈美江が海岸から歸つて
來たので、たうとうこの重要な仕事をまだ廿一の娘に頼んだと云ふ譯
なのである。

そこで、父は彼女に、明日はどうしても十二時前にR市の驛で彼女
に逢はねばならないと云ひ、今晚はWに歸つたら本宅に泊つて、明朝

十時に改めて銀行に出掛け、小切手を現金にかへて、十時四十分の汽
車でR市に來て來れ、さうすると、十一時四十五分にはR市の驛に付
くから、父は驛で彼女を待つてゐる、と云ふ手筈をきめたのである。
豫定通りに行けば充分に取引きの時間に間に合ふ筈である。

ところが、奈美江は父のきめたこの豫定を變更出來ると考へたの
だ。それは彼女がW市に着くと直ぐにその足で銀行へ行つて小切手を
現金にかへて、その金を持つて本宅で一晩泊れば明日はゆつくり出か
けられるだらうと考へたのだ。そして、父には斷ずらに、自分のこの
思ひ付きをいさゝか得意になつて實行してしまつたのだが、さて、か
うなつて見ると、家は締つてゐるし、大金を抱へて行く處がない！
彼女は全く途方に迷つた。邊りの寂しさがひしと身に沁みて來た。
遂ひに彼女は兎に角正木まり江の家を訪ねるのが一番近道だと判斷
した。うまくまり江が家にゐてくれれば都合だが、よし避暑に行つ
てゐたところで、大きな家のことだから、女中か留守居のものがゐる
に違ひない。

から決心して彼女は立上つた。と、丁度その時、街道の向ふから、
こつちへ向つて歩いて來る一人の男の姿を認めた。ことによるとこの
人の力を借りて家へ入れるかも知れないと思つたので、彼女はその方
へ近寄つて行つた。間近かに寄つた時彼女の方から聲をかけた。男は
振り向いたが、それは偶然にもまり江の弟の辨吉だつた。
『まあ、良かった、まり江さんお家においでになる？』と聞いた。



辨吉は色白で眼のバツチリした、小柄だが人目をひく若者であつた。テニスでもやつて來たと見えて、胸の開いた白いシャツを着て、テニスの帽子を眼深に帽つてゐたが、彼女の姿を認めると、それをとつてお辭儀をした。

『今日は。うん、姉さんは例の通り避暑に出かけてしまつたのですよ。家中で僕だけが除け者でね。親爺は僕にこの夏は仕事を續けなくちやいけないと云ふのです。毎日町まで通つてゐます。女中と爺や僕が留守番です。』

『さう、まり江さんがゐないのは残念ね。私、今とても困つてゐるところなの。』

『どうしたんです？』

『實はお父さんのお使ひで家へ急に歸つて來んですけれども、運悪く女中が戸締りをして遊びに出掛けちまつた後なの。電話でも掛けておくと良かったんですけども、それでどうにも入ることが出來ないの。貴方、どこか壊してでも家へ入るやうにして下さない？』

『お易い御用です。』

辨吉は勢よく玄關の石段を上ると、そこらをかたくやつて見たが、さう他易くは開きさうもなかつた。手の届く處で壊しても入れさうな處は何處にもなかつた。どうしても窓から入る工風をするより手はないのである。

『櫛子があると良いんだがナ』辨吉はさうつぶやき乍ら、納屋へ廻つ

て見たが、そこも締つてゐるので、何處からか蜜柑箱を見付け出して来て、それを踏臺にして窓へ跳び付かうとしたが箱は身體の重味でつぶれてしまつた。

『これぢやア、家を壊して入るより手はないですよ。』と彼は冗談を云つた。『仕方無いから、貴女が僕の肩に乗つて窓にとりついて、窓硝子を壊して、そこから手を差入れて鍵を外すんですね。』

そこで彼女は靴を脱いで、かゝんだ彼の肩に足を乗せると、彼はゆつくりと身體を持上げて呉れたので、やつと窓臺にとりつくことが出来た。彼女は手にした石で窓硝子を打割つて、その穴に手を差入れたが、まだ鍵まで手が届かない。

『もつと足を突張つて背のびしなくちや駄目ですよ。』

ところが、彼女はたうとう平衡を失つて、辨吉諸共地上にぶつ倒れてしまつた。

『やあ、大した札だなア!』

辨吉が起上ると同時に叫んだのも無理はなかつた。彼女が倒れるはずみに、それ迄後生大事に片手に抱へ込んでゐたハンドバックを抛り出したと見えて、轉つてゐるハンドバックの口が開いて、そこから百圓札の束がはみ出してゐた。奈美江は説明しなければならなかつた。

『その用で私海から歸つて來たの。明日父がどうしてもそれだけのお金が必要なんです。外に人がゐないものだから、私が銀行から持つて來たの……』と彼女は靴に札束を藏ひながら手短かに明日の用向きま

で話して聞かせた。

『大した金額ですね。僕なんぞ、そんな大金はたまに銀行の窓口でぞいて見たことがある位のもですよ。お父さんはよつ程貴女を信用してゐるんですね。』と辨吉は感に堪へた様に叫んだ。

彼女は自分が父の云ひ付け通りしなかつたので、餘計な苦勞をしなければならぬのだと話した。

『貴女、この金を持つて今晚獨りで此處へ泊るつもりなんですか?』

『さうよ、でも、誰も私がこんな大金を持つてゐるなんて氣の付いてゐるものはありませんもの。こゝへ泊ることだつて誰も知らないし』

『然し、銀行の窓口でお金を受取つたところを誰かに見られてゐるかも知れませんぜ』

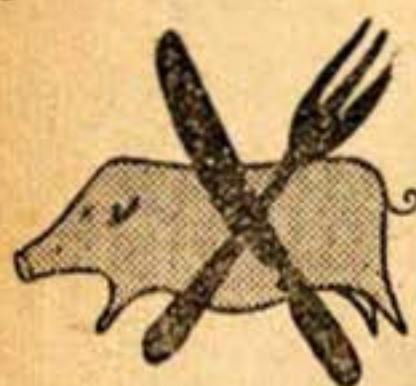
『大丈夫よ。支配人さんが事務室で渡して下すつたのだから、誰れにも見られはしませんわ』

彼女はもう一度辨吉の肩を踏臺にして、今度はうまく窓を開けることが出来た。そこから室の中へ飛込んで、直に元關へ廻つて、扉を開けると辨吉を招き入れた。辨吉は彼女の後から部屋の中へ入て行つた。

『ところで、貴女は晩飯はどうするつもりです。なんなら僕の家へ來て食べませんか?』

『いゝえ、結構よ。喉がさつきまで居たんでせうから、食物位あるでしよ。よろしかつたら、貴方にも御馳走して上げませう』

『そいつは有難い。でも貴女があの大金を持つて、獨りで此處へ泊る



食物に
對する

本 能 の 誤 謬

動物はその本能に委せて置いても體內に不足する養分を正しく食物から補充出来るかと言ふと、之に就いて面白い實驗があります。

例へば白鼠に白米團子と、白米に野菜類、ビタミンを混ぜて作った團子と兩方與へると、白鼠はビタミンの全くない白米團子を好んで食べ、瘦せ衰へて遂に斃死します。

之は生理的要求に對して本能が全然盲目であると言ふ一例であります。我々の食物に對する嗜好も玄米より白米が選ばれ野菜よりは肉類を好むのはどうする事も出来ぬ事實です。

然し乍らその結果招來されるビタミンの不足は體內の生理的機能に種々の障害を與へるもので、除病性虚弱體質、妊産婦の病弱、虚弱兒童、呼吸器系疾

患等の原因の一半は明らかに偏食のよるビタミンA及Dの不足であると言はれます。

「理研の純ビタミンA・D」
「理研ビタミン」の常用は、かゝる營養上の缺陷を是正し、正しき健康の維持増進に頗る有効なることが認められて居ります。

理研ビタミンには服用し易い小粒製品もあり、五拾粒入一圓卅、百粒入五圓、五拾圓、全國藥店百貨店藥品部に販賣

と云ふのは少し心配だな』

『大丈夫、こゝらで泥棒の話なんてあんまり聞かないでしよ。それに此處に人がゐるつてことさへ解らないくらいですもの』

彼女は早速藥所へ行つて、有合せのもので食事の支度にとりかゝつた。パンもあつた——、ハムも玉子もあつた。珈琲も湧かすことにした。奈美江はすつかり元氣を恢復した。

『どうも御苦勞様でした。貴方にも御馳走するわよ』

すると辨吉は急に思ひ出したやうに、

『僕、テニスで汗をぐつしよりかいてしまつたので、身體を洗はして貰ひ度いのですが、湯殿はどこですか？』と聞いた。

奈美江は彼に湯殿を教へてやつておいて、すぐに食事の支度にとり

かゝつた。すつかり出來上つてボーチへ食べものを運び出したところへ辨吉が再び姿を現はした。彼は食卓を見るとやゝ誇張した聲音で、

『かう云ふ露臺で、かう云ふ食事をとるとは洒落てますね。貴女毎週一回づゝ、こんなことをやつて見ませんか』と元氣さうに云つた。

『そんなことしてゐたら、家中の窓硝子が皆んな穴だらけになつてしまつてよ』と彼女も笑つて答へた。

もう夕陽が長い影を落して、遠くの方で雷が鳴つた。

ところへ、慌しく電話の鈴が鳴つて來た。二人は顔を見合せた。

『貴女が此處にゐることは誰れも知らない筈だが……』

『誰れだと思ふ？ 咲かしら？……あッ！ お父さんよ、きつと』

奈美江はさう云つて、電話口へ出て行つた。が、それは父親の聲ではなかつた。誰れだか突嗟には思ひ出せない聲だつた。(續く)

陣中に合掌を續けられた

念佛部隊長の聲を聽く

白 簾 靈 光

昨年、事變勃發するや勇躍征途につき世界の戦史に新たな一頁を加へた吳淞鎮の敵前上陸敢行以來、寶山城、大場鎮、蘇州、南市を

攻略して完全に上海を我が掌中におさめ更に南京に向つて猛撃、轉じて最近では徐州の大戦に参加し、不滅の武勳を立てた鷹森部隊の勇名は今や誰知らぬ者もない程に響きわたつてゐる。

此の勇敢なる部隊をよく指揮し一年有餘に亘つて陣中に策戦攻略の秘奥を盡した部隊長こそ我が念佛部隊長として有名な鷹森孝大佐その人である。その一端は既に昨年末本誌に洩らしたが、今回、大佐は命によつて陸軍士

官學校豫科生徒隊長に榮轉せられることとなり、限りなき愛惜の情を残して去る日陣中の部下に別れ内地に歸還せられた。

自宅に疲れの身を憩ふ間もなく大佐は各方面への挨拶に連日奔走せられたが特に本月七日は拙寺に訪問せられ親しく本尊に参詣せられた。次いで九日は大佐主催により岐阜市公會堂に於て遺族を請待し部隊の戦病死者追悼慰靈祭を催された。

此の追悼會は實に大佐が亡くした部下への心からなる供養であると共に、その遺家族に對する嚴肅なる慰問の機會であつたのであ

る。

午前九時、大公會堂は宮野縣知事、前旅團長片山少將等其の他關係の諸將星と大野少佐未亡人初め遺族二千餘名がぎつしり詰つた。

私は徒弟野々村弘宣を伴れて眞宗西別院の宇治田師と二人で導師の役をおつとめし各宗の僧侶二十餘名と共に讀經燒香した。

導師の燒香を終るや委員長は鷹森大佐殿の燒香を發願した。多くの供物を飾り上げられた英靈の前に大佐は進まれた。よく働いてくれた部下の英靈、命令のまゝに突撃して斃れた英靈、その爲によく武勳赫々たることを得た英靈、皆可愛い部下ばかりである、可愛

いゝ可愛い、その部下の英靈の前に今大佐は直立せられた。その胸中や如何に、満堂の参詣者はその一切を察したかの如き面持で視線を大佐に集めた。硬直した體をしづかに曲げて敬禮せられた。祭壇の英靈はあたかも慈父に接して笑ふが如くにも察せられた。満堂しんとして降なく立ち上る香煙は靜かに祭壇の上になびくのみ。(寫眞は壇上の藤森大佐)

次いで遺族、關係者の焼香終り讀經も終了

○

して一旦式を閉ち少憩の後、遺族及び一般に對する大佐の挨拶があつた。

聖戰一年餘に陽焼けのした顔で以て滿身これ誠意と云ふ嚴肅な姿で壇上に立たれた。遺族に對する初對面である。三軍を叱咤した猛將は今靜かに遺族の前に立つて首をうなだれ、悲痛な面持を漸く上げて口を切られた。

私は藤森であります、今回陸軍士官學校豫科生徒隊長を命ぜられて……

大命のまゝに動きながらも廻り歸還した事の

相済まぬと云ふ情がはつきりうかゞはれた。

約一ヶ年生死を共にした忠勇無比の部下たちと別れて歸つてきました。は

からずもこの追悼會を営むことが出来て諸英靈を慰め遺家族、銃後の皆様

に御慰問の辭をのべる機會を得まして不肖藤森衷心感謝感激の極みであり

ます、回顧すれば昨年の八月……一ヶ年に亘る苦心の戰闘を力をこめて述べられた時、謹聽する堂内の人々は手を堅くにぎりしめた。

○

多數の將兵を亡くして遺族の方々には何とも申譯のことばありません、この戰果をあげたことは上指揮官と忠勇果敢なる將兵が渡私報國、神様の様になつて努力した賜物であります、その實況を今私に話せと云はれても云ひつくせず、ただ感激そのものに打たれるのみであります。あの突撃するときの兵はもう神様のやうです、私は突撃する兵の姿を見て心の中で掌を合はせておがんで居りました、實に淨らかなどこから見ても私心の無い尊い姿、その姿を見て掌を合はせないものは人間ではない……

此處まで語りつゞけに壇上の猛將は哭いてしまつた、ほんとうに涙を流し口をくひしづつてゐる。満堂二千の参詣者は悉く玉の露を



宿しハンカチを押し當てゝゐる。ス、リ泣きの聲さへあちらこちらに聞こえる。親の情として、妻の情として、我が子我が夫を亡くして部隊長にいくらかの反感を持つものも或ひは有つたか知らぬが、いまこの壇上に満腔の謝意を表する聖將を仰いでは全く左様な私心は流されてしまつたらう。

しばらくしてから大佐は涙聲

：皇軍が激戦後日章旗をうちふつて萬歳萬歳を叫ぶと云ふがそんなところは見たくとも見られずたゞ部下は戦友や部隊長、部隊長は部下に感謝して互に抱き合つて涙を流すほかに何もありません、實に神々しい光景であります。

念佛の尊さをはつきり體驗せられてゐる此の部隊長にこそよく部下を神様として合掌することが出来たのである。

○
御列席の遺族のお方はこの死花の咲いた英靈に充分の供養を願ひ度い、私も一生部下の英靈を供養する固い決意をもつて

ゐます、靈を慰めることは強く生きてゆくことにあり一家の圓満、隆昌によつて英靈たちはほんとうに満足するのです。どうか申譯にしのびないのですが、くれぐれも『強く生きて下さい』私で出来ることでありましたらどんなことでもお世話いたしますからどうか何時でも御相談下さい、

話は更に續いたが陳謝の情をこめ感激にむせんで曾ての鬼部隊長は今や聖なる軍神そのものの如く壇上に輝いてゐる。

昨夜までいろ／＼と申上ることを頭の中に繰り返して居りましたが今諸英靈、遺族の皆々様にお會ひして感慨實に新たなものがあつた、胸にせまつて言葉が出なくなりまして。……

○
挨拶は流暢を極むるものでもなかつたし又その内容も長いものではなかつたが終始感激の中によく自らの所信を披瀝し無言の大雄辯を以て遺族へ満足なる慰問の辭を終られた。

大佐が陣中にあつてよく確固たる大信念を有ち得られたのはそれは必ず平素念佛をよくせられたからである。從軍僧等によく特別の便宜を與へられたのも佛教信者としての大佐のはからひが然らしめたものと思へる。

殊に突撃の兵を後ろから合掌してこれを神々しく拜まれたその大佐の姿こそ正に佛の姿ではなからうか、念佛の力が實にあの敵前上陸を敢行し、難攻不落をほふり、堪えがたきを堪え得たのである。信仰の力がかほどまでに偉大な、不可思議な、超人的な「力」を出し得たのである。鷹森大佐一人の念佛が全部下の力となり不可思議力となつて現はれたのである。

宜なる哉、その留守宅にはけい子夫人はじめ八十二歳の母君がよく念佛して大佐の武運を祈りつゞけられたのである。

* * * *

* * * *

短歌

與謝野朗子



富山縣 藤田四三句

みいくさの庭に立たねど汗しつ

わがなすわざの樂しかりける

(評)

平淡な調子で歌はれてゐるけれど内容にはさうではない。國民としての重大な自覺を作者はよく感じ、よくつとめて居ながら、徒らに悲壯がらずおほらかな調子で云つてゐるのがよい。

京都市 福島孝治郎

大君に捧ぐる命かるけれど子の行

く末の如何にかあらん

(評)

悲痛な叫びである國家のために命を捧げて悔いぬ兵も時に父亡き後の幼兒のことを思ふ、これも人としての情である。

新義州 球磨 蘇

水あかりする大河ありゆふぐれに

蟬鳴ひくくたかく飛びかふ

(評)

大陸の大河の夕景をうつして爽やかになつかしい作。

歌山縣 奥村 映水

大南風のしぶきを受けてわびしき

も傾き咲ける島の濱綿木

靜岡縣 澤田 兵調

つつしみを知らぬ人かなおほけな

く寝て語るなりみほとけの道

東京市 三浦 順子

重傷兵ややよきときはほほゑめり

黙しるる日はわれもさびしき

埼玉縣 小濱 清秋

眞白なる朝顔の花好みつる亡き姉

の日に二つ開きぬ

神戸市 秋田 里二

おそろしき山の津波のくだるとき

はかなかりけり世のいとなみは

京都市 永田 七郎

涼しきは青葉の下を行く水に時折

り走る魚の子のむれ

朝鮮 留江 八年坊

不足ぞと思へば悲し足れる身とな

しつつ今日を安くあらまし

北海道 渡邊 信次

獨り居に君が活けつる白百合の花
いつまでも匂ひ居よかし

京都府 郡司 島誠也

夕星の光るを見つて高粱の青く茂
れる曠野を思ふ

飯田市 宮澤 圭子

もののふを思へば野にて麥を打つ
暑さも云ふに足らぬ心地す

盛岡縣 李 沛 露

入りぬべし淨くしづかにつつまし
さ心を持たばみ佛の世に

北海道 寺田 眞山

戀しくて尋ね來にけり稻岡の里に
鑽まる法の師のあと

栃木縣 大輪 清

詠む人の心の動き知られつつその
面影のなつかしきかな

東京市 小泉 妙春

先立ちし子に教へられいみじくも
み佛にあふれられしきに生く

山梨縣 伊藤 久次

勤勞の奉仕の日なりとく起きて兵
を思ひて額に汗す

千葉縣 高橋 美矢子

朝ぎりの涼しき道を母の手をとり

て詣でぬ山のみ寺に

北海道 花田 順佳

國のため花とちりにしますらをの
譽れは代々にかくはしきかな

三重縣 加藤 陶月

子は泣けど父は歡呼に送られて勇
ましく發つ泪かくして

小樽市 中村 もん

大君のみたてとなりしますらをの
柩の前に感謝ささげぬ

松山陸軍病院 A・T生

單調な病の床にいくそたび淨土よ
みけん傷癒えてゆく

大阪府 清水 明定

咲き下す高野の奥の夕嵐身にしみ
渡る秋となるかな

關島縣 齋藤 華舟

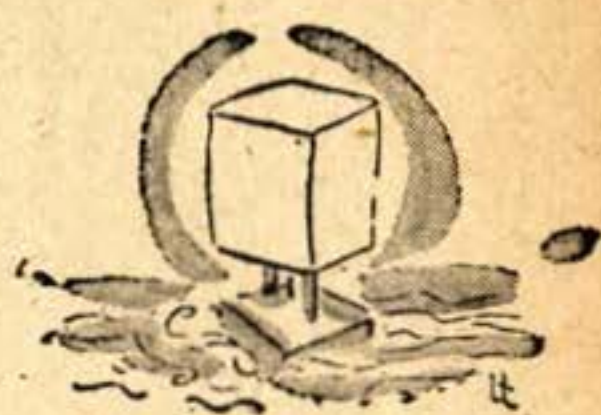
買ひ興へ得ぬと知りつ店頭の小供
の夏服手に取りにけり

靜岡縣 一向 山人

默禱のさいれん響き祈りたるこの
一時の心忘れず

投稿規定

官製はがきに一週二首以内
とし、「淨土」編輯部歌壇係
あて送ること



山花合掌

吉田絃一郎

山は日も日も雨。溪川の水音は、夜も日も募りに募る。ただ一人終日川に面したる一室に閉ぢ籠つてゐれば、旅の宿も禪堂である。夜明けては蜩の聲に夢を破られ、川沿ひの温泉に浸される。

そこでもたゞ一人である。桂川の濁流はものすごいほどに浴室にこだまする。佛前に讀經、簡単な朝の食事、茶を立てゝ佛にさげろ。終日黙々として溪川の音を聴き、山を眺め、雲を仰ぐ。三十年來故人と歩いた湯の町では、一步門を出れば一草一石悉く思ひ出をたゞへてゐる。山にはいろいろの秋草の花も咲いてゐることであらう。しかしわたくしは雨の晴れ間に山の墓を二度おとづれた他には、一步も外に出ない。そして黙々として物思ふでもなく、思はぬでもなく終日溪川の音につままれてゐる。

二日つゞけて若い女が死んだ。二人とも一人の子を遺して逝つた。二日目に死んだ女の連れ合ひといふのは俳諧をやつてゐる男

で、椎茸を賣つてゐる。いつかわたくしと妻で店頭に立ち寄つた時その男は帳場格子の前に坐つて考へ込んでゐた。何をしてゐるのだとたづねると、句を案じてゐるのだといつて、認めたものを出した。妻は笑ひながら店頭の筆を借りて添削してやつてゐたが、後に天の賞を貰つたといつて、椎茸屋の主がお禮に來たことがあつた。

去年わたくしの妻が亡くなつたをり椎茸屋の主も、そのことを言つて悲しんでゐたが、今日は自分の妻を亡くしてさぞ悲しんでゐることであらう。

人は生まれなかつたらその悲しみを知らないですんだであらう。人は妻を持たなかつたらこの悲しみを知らないですんだであらう。しかしまた人間に生まれればこそこの悲しみを知らしていただくことができるのだ。かつて妻を持つたればこそこの悲し

みを知らしていたぐことができるのだとも思ふ。

熊谷直實は武人としては頼朝よりも、梶原よりも不運な人であつた。花の荒武者敦盛を殺したといふ點に於いては源氏の武將たちの間で一番深い悲しみを知つた人であつた。しかしかれはその悲しみのためにこそ頼朝よりも誰よりも深い世界に生きることができた。因縁といはうか、選りに選つて敦盛を討つたといふことはかれをして源氏方に於いて最大の苦惱を嘗なければならぬ者となした。かれは時としてあまりに残忍な宿縁に對して御佛を怨んだこともあつたであらう。しかもかれはその悲慘な因縁に沈溺したればこそ眞實の世界に生きるすべを見出したのであらう。

人生では最も愛し合つてゐる者こそ實はお互に殺し合つてゐるやうな場合もある。わたくしは今朝も桂川の音を聴きながら妻のことを思つてゐた。病前の妻の顔色、病院に於けるわたくしの看護の手ぬかり、何々といつてわたくしの胸を刺すものばかりである。この刹那この身を溪に投げてでも相すまぬものがある。妻の死後一日としてこのなやみに苦しめられないことはない。しかも妻は一切をわたくしに感謝しつゝ、わたくしは世界で一番幸福な女でありました」と言つてまことに美しく微笑みながら死んで行つた。かつて一生の間見たこともないほどの美しい微笑であつた。妻は一切のわたくしの罪をゆるしつゝ、感謝しつゝ死んで行つて、今もなほかの女は淨土に於いてわたくしのために泣き、わ

たくしのために微笑んでゐてくれるであらう。

妻を殺したものはわたくしであるときへ思ふ。この苦しみは終生わたくしの胸を抉るであらう。しかもかの女はわたくしに手を握られたまゝ微笑みつゝ大往生を遂げた。御佛の大慈大悲をわたくしは眼のあたりに見た。もうそれは死んで行く妻でなくして、御佛それ御自身でさへあつた。

人間の業苦は幾百千度生まれ更ることによつてはじめて救はれるものであるかも知れない。わたくしはふたゝび妻と逢ふであらう。そしてさらに深い悲しみを知るであらう。

×

×

このごろは山では雨が降りつゞいてゐるので、川の瀬音はものすごいほどである。しかしどんなに流れの音がはげしくとも何の障りにもならぬ。都會から來た人たちの間には谷川の音の聞えぬ静かな部屋をと頼んでゐる人もある。しかしわたくしは谷川の音と聴けば却つて睡眠を樂しむことができる。都會の人たちは山を征服するなどといふ不遜な考へから山に入る。だから一つの石もつまづきとなる。山を愛し、山を敬するものは一つ一つの石を押しいたゞいて通る氣持になる。谷川の音もありがたく、嵐の聲も尊い。

夏目漱石氏が亡くなられる時「死にたくない」といふやうなことを言はれたやうに新聞に書いてあつたことを記憶してゐる。實



新渡戸博士と

お茶師の話

篠原文雄

私は今から十數年前、静岡市にある民友新聞社の記者として働いてゐたが、丁度そのころ故新渡戸稻造博士が關西旅行の歸途、静岡へ立寄られ、二、三日滞在されたことがあつた。新渡戸博士からアメリカで知遇を得たといふ私の社の大石社長に連れられて、博士の宿舎である大東館へお訪ねしてお話を伺つたことがある。いろんなお話の中に、私にとつて終生忘れ得ない思ひ出ばなしがのこつてゐる。それは、博士が東海道の新幹線の中で、茶工場の貧しい職人と知り合ひになつたことから始まる。

博士の讀書好きは有名なものだが、汽車の中でも船中でも決して書物を手からはなさなかつたといふことをきいてゐる。煙草も酒もなかつたといふこと、博士にして見ればそれだけ讀書力は人一倍強かつたわけである。

その折りも、永い間の習慣で旅行に出る時は必ず書物を手荷物にする癖がついてゐることや、遠い外國など旅するに、書物のない旅は退屈を感じること、讀書に倦きた時は、内地の旅行などでは三等車へ出かけて、誰れでもよいから話好きな人と世間話に打ち興じることによつて、車中の徒然が慰められるからだといふ云はれた。

さういふ汽車旅行の或る日、博士は例の通り讀書してゐたが、少しばかり退屈を感じてきたので、自席の二等車から三等車へ降りて入つて行つた。片手には國府津で購つた汽車辨當を持つて、どこか空いてゐる座席はないかしらと思ひながら車内を見わたすと、片隅の方にひとりぼつねんとしてゐる中年男が博士の眼に映つた。都合よく座席が空いてゐたので、男の座席に近づくと、彼は博士を三等客と見込んだのか、自分ひとりで座つてゐるのをとがめられたかのやうに、無器用な手付で博士を招いた。

博士は喜んで、彼のさしづどほり向ひ合つて腰を降ろした。そして、手に持つてゐた汽



車辨當を網棚の上に置いた。博士がその男を一瞥すると、職人風の温和しい人柄だつた。頭髪を五分刈りにした素朴な風貌の持主で、如何にも實直さうな感じを興へた。服裝なども綿服の極く粗末なものを着てゐた。博士は彼に話しかけようとしたが、彼は何事か物思ひに沈んでゐるらしく、向ひ合つた博士の視線をのがれるやうに俯向いてばかりゐたのである。彼は兩手をきちんと膝の上にのせたまま顔を上げようとしなかつた。

博士はふと、何の氣

もなく彼の手に眼をとめて驚いた。彼の兩手の指には手爪がないのである。博士はひどく無氣味に感じて、もしかすると癩患者かも知れないと思ひこんだりした。

博士がそんな風に彼の身の上を考へてゐると、彼は暫く經つてから、しきりに網棚の上を盗視するのだつた。そこには、博士が先刻網棚の上にのせた稻荷鮓で、二つばかり食べて残りを叮嚀に包紙に包んで、また食べたい時に食べようと、わざ／＼持つてきたのである。

博士はこの癩患者らしい男はきつと、失禮して國元へ歸る途中かもしれない。そして今に空腹を覺えてゐるのではなからうかと思案してゐると、彼は突然博士に話しかけてきたのである。

「まことに失禮に存じますが、網棚の上につてゐるお辨當はあなたのものでせうか」

と遠慮深げに云つたので、博士は即座に、

「ええ、さうです。一つ二つ手をつけましたが、よろしかつたらどうぞ御遠慮なく召上が

つて下さい」

と云ふと、彼はとてもうれしさに、にこにこしながら、

「さうですか、では遠慮なしにいたゞかせてもらひます」

と云つて、彼は立ち上ると、網棚の上にのつてゐるお辨當を手にして、

「これで、やつと國元への土産になります。

有難うございました」

と二度ばかり繰返して、博士の前に丁寧に
お辭儀をした。彼はどうやら空腹を我慢して
ゐるらしく、博士からもらつたお辨當を自分
で食べるのでもなく、大事さうに懷ろに入れ
ると、安心したやうな面持になつて、博士と
ぼつりぼつり話したしたのである。

彼の語るところによると、その男は静岡在
の茶工場の職人で、その日、豊橋の國元にゐ
る老父が重病だといふ電報を受け取つて、二
年振りで郷里の我が家に病む老父の許へ還ら
うとしてゐるのである。我が家には彼の最愛
の妻子も待つてゐるといふ。

それなのに、彼には一錢の蓄へも無かつた
ので、老父へのお見舞の品も、子供への土産
もなし空手で還らねばならなかつた。老父の
病氣も氣にかゝるし、土産の品も心配の種だ
つた。彼が憂ひ沈んでゐたのはそのためであ
る。そこへ偶然車中で興へられた十五錢のお
辨當が、彼にはこの上もなく役立つたのであ
る。

彼は十年も茶工場の手揉師として働いてゐ
たために、大事な手の指の爪まで剥いでしま
つたのだ。二年や三年では爪が剥げるもので
はない。五年十年と年期をかけると、知らず
知らずのうちに爪が剥がれるといふことであ
る。彼はきつと勤勉實直なお茶師に相違ない。
十年も爪が剥がれるほど働いて、國への手土産
を持たない彼の胸中を考へると痛ましい。
それまで茶工場で働いて得た金は、殆んど全
部國元へ送金してゐたといふことであるから
彼の律義さがうかがはれる。

彼の血のにじむやうな身の上話をきいた博
士は、最初彼の手の指を見て、爪のないのを

不審に思つたことに對して、非常にすまなく
感じたといふことだ。博士は札幌農學校の出
身であるが、茶工場に働く職人に爪がないこ
とを彼によつて初めて教へられたと告白され
たのである。

「お茶は玉露にかぎります」などといふ人は
玉露の中には多かれ少かれ人の爪がまじつて
ゐることを知るべきである。上等な玉露には
それだけ多くの犠牲がたゞみこまれてゐるこ
とを知るべきだ。と博士は語られたのであ
つた。

私は日本茶を喫むとき、博士のお話がしば
しば思ひ出されてくる。學識豊かな博士が茶
工場に働く貧しい職人にをしへられたと云つ
て、お話された床しい心境が、博士の溫顔と
ともに、私の心に強く刻まれたのである。

おなじ心に極樂をねがひ、念佛を申さん人
をば卑賤の人なりとも父母師匠にもをとら
ずおぼすめすべし。今生の財寶ともしから
んにもちからをくはへ給ふべし

——法然上人法語——

信 仰 相 談

・・・中村辨康師擔當・・・

(本欄への質問はハガキに住所氏名御明記の上信仰相談係宛のこと、誌上匿名は可)

信仰を得たい

問

私はかねてから浄土をなにより楽しく拜讀致して居る者でございます。女學校時代よりしつかりした信仰を得たいと熱望致してゐる者で御座いますが、至誠心が足りないものか、未だに安心を得ることが出来ません。この上は身をもつて修養いたしたく存じますが一燈園は念佛を生活の中心としてゐないでせうか。もし適當でございましたら何とぞ、場所を御教へ下さいませう。支部が地方にございますなら、なるべく近い所がよろしう存じます。また外に指導して下さいませう。所がございましたら、いづれ

答

にても結構に存じます。信仰相談としては少く御迷惑かとも存じますが、何とぞまげて御願ひ申上ます。(求道女)

御地の近くに一燈園の支部があるか無いか存じません。本部は京都鹿ヶ谷かと思ひます。また浄土宗の御寺は延岡を始め御縣内に十三四ございしますがよく存じませんのでハツキリ申上げられません。實は私も十數年前に一切を捨て、「一燈園」へ走らうかと思つて二ヶ月程毎日のやうに思ひ悩んだことがありましたが、年取つた母親になげきをかけるのを考へると、ツイ足がにぶつ

て決行が出来ず、爲に雑誌「光」を取つて讀んで居ますと、一燈園の牛身に「宣光社」と云ふのがあつて矢張り全部を捨て、居ない事が明らかになつたので、遂に一燈園へ走ることを思ひ止まつたのでした。私の思違ひであつたかも知れませんが、妻も子も親も所有物も一切を捨てるのが「本當」だと思つた爲めに母親になげきをかけるであらうことを思ふと「子」としての務めから一寸捨て切れなかつたのです。然し考へて見れば一切は預り物としてあるのであつて元來無一物との確信に達すれば必ずしも一燈園へ行かなくともよかつたのでした。それで今では一切を「預り物」として受入るべきを受入れて居るやうな次第であります。もとより私は貧乏でもあり借金もありま

す。其上人の親として子供の教育をも責任付けられて居ります。然も一燈園の「宣光社」はやはり預り物として經財を活用して居るのですから、結局はそれも精神の問題だと存じまして、もう一燈園のことは私の心の中にはスツカリなくなつてしまひました。それですから今の一燈園が何んな様子かサツバリ存じません。また一燈園では基督教でも佛教でも信仰を選擧して居りませんから無論「念佛」を以て生活の中心として居ないと思ひます。だから一燈園に行つて「念佛の信仰」が増進するか何うかは疑問だと思ひます。

念佛は如来様を以て指導者として居ります。人間は不完全です。其人の修養實踐の範圍を抜出ることとは出来ませんから大概知れたものです。それよりも

つて下さい」

と云ふと、彼はとてもうれしうに、ここにこしながら、

「さうですか、では遠慮なしにいたゞかせてもらひます」

と云つて、彼は立ち上ると、網棚の上にのつてゐるお辨當を手にして、

「これで、やつと國元への土産になります。

有難うございました」

と二度ばかり繰返して、博士の前に叮嚀にお辭儀をした。彼はどうやら空腹を我慢してゐるらしく、博士からもらつたお辨當を自分で食べるのでもなく、大事さうに懷ろに入れると、安心したやうな面持になつて、博士とぼつりぼつり話したしたのである。

彼の語るところによると、その男は静岡在の茶工場の職人で、その日、豊橋の國元にゐる老父が重病だといふ電報を受け取つて、二年振りで郷里の我が家に病む老父の許へ還らうとしてゐるのである。我が家には彼の最愛の妻子も待つてゐるといふ。

それなのに、彼には一銭の蓄へも無かつたので、老父へのお見舞の品も、子供への土産もなし空手で還らねばならなかつた。老父の病氣も氣にかゝるし、土産の品も心配の種だつた。彼が憂ひ沈んでゐたのはそのためである。そこへ偶然車中で與へられた十五銭のお辨當が、彼にはこの上もなく役立つたのである。

彼は十年も茶工場の手揉師として働いてゐたために、大事な手の指の爪まで剥いでしまつたのだ。二年や三年では爪が剥げるものではない。五年十年と年期をかけると、知らず知らずのうちに爪が剥がれるといふことである。彼はきつと勤勉實直なお茶師に相違ない。十年も爪が剥がれるほど働いて、國への手土産を持たない彼の胸中を考へると痛ましい。それまで茶工場で働いて得た金は、殆んど全部國元へ送金してゐたといふことであるから彼の律義さがうかがはれる。

彼の血のにじむやうな身の上話をきいた博士は、最初彼の手の指を見て、爪のないのを

不審に思つたことに對して、非常にすまなく感じたといふことだ。博士は札幌農學校の出身であるが、茶工場に働く職人に爪がないことを彼によつて初めて教へられたと告白されたのである。

「お茶は玉露にかぎります」などといふ人は玉露の中には多かれ少かれ人の爪がまじつてゐることを知るべきである。上等な玉露にはそれだけ多くの犠牲がたゞみこまれてゐることを知るべきだ。と博士は語られたのであつた。

私は日本茶を喫むとき、博士のお話かしばしば思ひ出されてくる。學識豊かな博士が茶工場に働く貧しい職人にをしへられたと云つて、お話された床しい心境が、博士の溫顔とともに、私の心に強く刻まれたのである。

おなじ心に極樂をねがひ、念佛を申さん人をば卑賤の人なりとも父母師匠にもをとらずおぼすめすべし。今生の財寶ともしからんにもちからをくはへ給ふべし

——法然上人法語——

信 仰 相 談

・・・中村辨康師擔當・・・

(本欄への質問はハガキに住所氏名御明記の上信仰相談係宛のこと、誌上匿名は可)

信仰を得たい

問

私はかねてから浄土をなにより楽しく拜讀致して居る者でございます。女學校時代よりしつかりした信仰を得たいと熱望致してゐる者で御座いますが、至誠心が足りないものか、未だに安心を得ることが出来ません。この上は身をもつて修養いたしたく存じますが一燈園は念佛を生活の中心としてゐないでせうか。もし適當でございましたら何とぞ、場所を御教へ下さいませう。支部が地方にございますなら、なるべく近い所がよろしう存じます。また外に指導して下さいる所がございましたら、いづれ

答

にても結構に存じます。信仰相談としては少々御迷惑かとも存じますが、何とぞまげて御願ひ申上ます。(求道女)

御地の近くに一燈園の支部があるか無いか存じません。本部は京都鹿ヶ谷かと思ひます。また浄土宗の御寺は延岡を始め御縣内に十三四ございしますがよく存じませんのでハツキリ申上げられません。實は私も十數年前に一切を捨て、「一燈園」へ走らうかと思つて二ヶ月程毎日のやうに思ひ悩んだことがありました。が、年取つた母親になげきをかけるのを考へると、ツイ足がにぶつ

て決行が出来ず、爲に雑誌「光」を取つて讀んで居ますと、一燈園の牛身に「宣光社」と云ふのがあつて矢張り全部を捨て、居ない事が明らかになつたので、遂に一燈園へ走ることを思ひ止まつたのでした。私の思違ひであつたかも知れませんが、妻も子も親も所有物も一切を捨てるのが「本當」だと思つた爲めに母親になげきをかけるであらうことを思ふと「子」としての務めから一寸捨て切れなかつたのです。然し考へて見れば一切は預り物としてあるのであつて元來無一物との確信に達すれば必ずしも一燈園へ行かなくともよかつたのでした。それで今では一切を「預り物」として受入るべきを受入れて居るやうな次第であります。もとより私は貧乏でもあり借金もありま

す。其上人の親として子供の教育をも責任付けられて居ります。然も一燈園の「宣光社」はやはり預り物として經財を活用して居るのですから、結局はそれも精神の問題だと存じまして、もう一燈園のことは私の心の中にはスツカリなくなつてしまひました。それですから今の一燈園が何んな様子かサツバリ存じません。また一燈園では基督教でも佛教でも信仰を選

擇して居りませんから無論「念佛」を以て生活の中心として居ないと思ひます。だから一燈園に行つて「念佛の信仰」が増進するか何うかは疑問だと思ひます。

念佛は如来様を以て指導者として居ります。人間は不完全です。其人の修養實踐の範圍を抜出ることとは出来ませんから大概知れたものです。それよりも

信 仰 相 談

念佛して如来様の御指導を仰ぐのが一番よいことで一番無理が起らないものと存じます。念佛には場所もありません。時もありません。身分もありません。有るがまゝの姿で素直に行けるのですから、なまじな事をしない方がよろしいでせう。一燈園主義を徹底的にすれば「共產主義」になります。然しそれで本當の平等があるでせうか。私達は天地に満つる如来様のふところの中に居るのです。然るに自ら自狂つて藻掻くのは「我が儘」と云ふものです。念佛は恰度「お乳」のやうなものです。ですから一心に「念佛」して居れば段々信仰心が育つて来て何事も明らかに成つて参ります。仕事しながらでも何でもよいから念佛して下さい。然し生ぬるくなつてはいけませんよ。段々に信根の根を張らせ信力

を養つて行くやうにして下さい。また必ずしも聲に出さなくてもよいですが、聲と云ふものは妙なもので、一邊外へ出て

般若心經について

再び自分の耳に入るところに信仰培養の妙味があります。人前は遠慮して一人の時聲に出されることよろしいでせう。

問

一、般若波羅蜜多心經の正しい誦し方、句讀點を御教示下さい。

二、右を吹込んだレコードあらばその賣先。

三、淨土宗のものが心經を朝夕誦して差支へなきや。

四、淨土宗及び淨土眞宗の眞髓を簡單明瞭に了知出来る書物と經典。(埼玉・轉向所化)

答

一に就ては左の通りです。

(摩訶)般若波羅蜜多心經
觀自在菩薩。行深般若波羅蜜多時。照見五蘊皆空。度一切苦厄。舍利子。色不異二

空。空不異二色。色即是空。空即是色。受想行識亦復如是。舍利子。是諸法空相。不生不滅。不增不減。不垢不淨。不異不常。是故空中無色。無受想行識。無眼耳鼻舌身意。無色聲香味觸法。無眼界。乃至無意識界。無無明。亦無無明盡。乃至無老死。亦無老死盡。無苦集滅道。無智亦無得。以無所得故。菩提薩埵。依般若波羅蜜多故。心無罣礙。無罣礙故。無有恐怖。遠離一切顛倒夢想。究竟涅槃。三世諸佛。依般若波羅蜜多故。得阿耨多羅三藐三菩提。故知。般若波羅蜜多。是大神呪。是大明呪。是無上呪。是無等呪。能除一切苦。眞實不虛。故說般若波羅蜜多呪。即說呪曰。揭諦揭諦。波羅揭諦。波羅僧揭諦。菩提婆訶。

最初の經題の「摩訶」は元來ないのが、本當ださうですが一般に今ま用ひて居りますからやはりお讀みになつて結構です。二のレコードは知りません。三、淨土宗でも心經を御讀みになつて差支へありません。元來此經の中心點は「無所得」の氣持にならねば「眞實生活」を得ることが出来ないといふことを示したものです。即ち私達には「所得を望む」心があるの、色々の苦しみがあるのだから、其「有所得心」を去

信 仰 座 談 會

つて明るい「無所得心」の世界へ行くことを心掛けよと云ふのです。それで最後の呪文は行け。行け。彼の岸へ行け。彼の岸へ行けば「覺」がある。それは本當のことだ。と云ふ意味です。即ち「自我的

信仰座談會のおすゝめ

(來聴歡迎)

本誌で御馴染の中村先生をお招きして、去る二月から毎月二回以上信仰座談會を開催し最早や十數回續けて参りました。

集る者はお知合の方々四五人で極めて小さな會で御座います。が、誌上だけでは到底得られない眞摯な信仰談を承ることが出来て、何時の間にか熱心な念佛信者にさせられて仕舞ひましたので、折角の御話を僅

欲望」を破ぶることをすゝめたものです。

四の書物は各宗綱要など御覽になつたらよいでせう。經典は共に「淨土三部經」に依て居りますから區別はありません。

かの者のみで獨占するのは勿體なうございと思います。先生の御許しを得て此九月から公開し、もつと廣く同信の方々の御來聴をおすゝめしたいと存じます。

何と申しても信仰は人格的交流が早道だと存じます。直接御遇ひしながら直接お話を承り直接疑問を解いて頂くのは、信仰を求める者に取つて一番よい事でございます。どう

か心ある方は御遠慮なく御來會の程を御願ひいたします。

公開信仰座談會第一回

日時 来る九月四日(第一日)

曜)午後七時

會場 本郷區東片町(白山上)七八

電話小石川(85)四九七六番

美容大學院 橋本樂榮方

講師 中村辨康先生

會費 不要

(第二回からの日時は其都度御知らせ致します)

御都合がつかなくて御來會が出来ない方は御住所を前記會場までお知らせ置き下さい。ますれば、其次の日取りを御通知申し上げますゆへ、思ひ立つたらずぐさま是非御住所を御知らせ下さいまし。毎月二回又は三回開ますのを、本誌上では一一御知らせが出来ませんと存じますから。

志願主 橋本樂榮

法然上人鑽仰會發行

中村 辨康 著	信 仰 讀 本	定價二十錢 送料三錢
藤井 實應 著	法然上人法語抄	定價三十錢 送料六錢
大野 法道 著	法 然 上 人	定價十五錢 送料三錢
中村 辨康 著	法然上人の信仰生活	定價三十錢 送料六錢
同	講話一枚起請文	定價十錢 送料三錢
續 仰 會	念 佛 讀 本	定價二十錢 送料六錢

支那奇譚

山寺の巻

吉水靈家

故人、西のかた黄鶴樓を辭し、
煙花三月揚州に下る。
孤帆遠影、碧空に盡き、
たゞ見る長江の天際を流るゝを。

これは有名な李白が長江を詠じた名句である。其の昔李白が黄鶴樓上に於て廣陵に赴く孟浩然を送つた時も、今も、揚子江の流れはたゞ天際に極まつて流れてゐる。幾千春秋の人々の営みを、榮枯盛衰の物語りに沈めつゝ、どよみなく流れに流れて盡くる處を知らない。

昨夏以來、支那膺懲の聖戰には、夢まどらかな江南の天地も、血なまぐさき砲煙彈雨の戰場と化してしまつた。百千の護國の英靈

の靜まる處、江南の天地には既に明朗新支那の生誕を見てゐると云ふ。東亞の歴史が開けて以來、最も古き支那は又新らしき支那に甦りつゝある。古語にも「古きを温ねて新らしきを知る」と云ふ、古き傳統を支那の山寺にたづねる事は、たゞに興味深い一席の物語りでもあるまい。

◆
皇軍苦戰の跡、江南常熟に乾隆帝の扁額興福禪寺の四大文字輝く山門を持つ興福寺を訪なうて見やう。

境内はいつも幾人かづゝの男女がめい／＼香華を持つて參詣してゐる。佛前に三跪九拜して家内繁盛と延命長壽を願ふところは、特

に民間信仰となつて深く人々の頭腦にしみわたつた道教の結果でもあらうか。

老婆は支那服の裾をひろげながら、しきりと香の灰を兩手にかき寄せるであらう。

「婆さん、その灰を一體どうなさるんで」

「うちに病人がありますのでな。長のわづら

ひで困りものだで、今夜この神の灰を頂いて

歸り、煎じて飲ませて見るつもりなのでな」

いわしの頭も信心からと云ふ諺がある。

つい先頃迄邪教としてはびこつた大本教あたりと大差はない。すつかり俗信仰になつてしまつた支那の佛教が、此の一事によつても知

れると云ふものである。

◆
もと／＼支那人程法律のきらひな人種はないと云はれてゐる。洋々乎たる長江に明け暮れる彼等の生活からは、せゝこましい日本での様な杓子定規は困りものなのであらう。

こゝに戦線に活躍する長友一瀬少尉の手紙がある。

此の手紙を書いてゐる處はある居士林で、

毎日祈禱をやつてゐます。支那に来て初めて聞くものです。居士林と稱するだけあつて約三、四十名のものがやつてゐます。朝は三時から夜まで休みなしです。

しかもその祈禱は世界平和と銘打つてゐるのです。澤山の皇軍の中で、軍馬の蹄や車輪の音のする中で世界平和を祈禱する人々は、考へ方によつては度胸のよいことですが、家を焼かれようと殺されようとわれわれの前で世界平和を祈禱する彼等は内地では一寸見られぬ風景です。

それは兎も角、日支相互に戦火を交へる眞只中に、世界平和を祈念すると云ふ彼等には、一口に笑へない大きな精神的な訓練さへが見られると云へやう。



興福禪寺は申すに及ばず、支那の寺々には食物のこと、料理から朝夕の勤行、坐禪、雲水の一切から寺院生活に必要な米鹽、耕農、炊事萬端、印刷のこと、竹器の製作、竹割り轆子の修繕と日常生活一切が行はれる。つま

り單なる宗教機關と云ふよりは力強い自治生活の團體でさへあるのである。

寺内には寺務室の處に賣店酒保を設けて砂糖、雜貨、石油、油類、香華、紙、筆墨、たばこ、南瓜、西瓜迄そろへてあると云ふのだから大したものである。

一切の肉食をさけた精進料理で毎日五度の



食事をなすと云ふのも變つてゐる。

支那の寺僧は、この様にして幽玄な生活の中に自身をまかせ切つた者が多いとの事である。彼等の持つてゐる性格は古き傳統の中にしつかりと植ゑられてしまつてゐる。

廬山の頂にある天池寺と云ふ禪寺では、六朝時代から代々續いてゐる古寺であると云ふが、廢れた塔が今でも峭然と残つてゐると云ふ。

或る人が其處を訪ねた時、山僧はほこらし顔に「龍の子」を見せて呉れると云ふので、どんなものかと見てみると、イモリを籠に入れたのをうやうやしく持つて來たと云ふことである。馬鹿々々しさもこのくらゐになるとかへつてこちらの方が氣が變になつてその人は聞いた。

「一體これは何處でとれたんです」すると山僧は益々得意になつて答へたと云ふ。

「長江に獲たり」と。

イモリを本當に「龍の子」と信じて疑がはぬあたりは、支那山寺の僧侶の性格を語つて餘りない。支那宣撫の一すぢ繼で行かぬ所以でもあらう。支那は何處迄も謎である。



かつぼう鳥どりの話はなし

金 子

和

子供の時分、私はお母さんから、よく「かつぼう鳥」の話の聞きました。お祖母さんか

らも聞きました。そしてお母さんは、やはり

子供の時、それをお祖母さんから聞いたので

した。そのお祖母さんも、やはり子供の時、

そのお母さんやお祖母さんから聞いたので

せう。ですからこれは、ずっと昔から、つぎ

／＼に傳はつて来た話です。

さて、私の生れたのは田舎ですが、田舎で

は、春になると人がみんな田んぼや畑へ出て

働きます。種子を蒔いたり、苗を植ゑたりし

て一年中に食ふ食べ物つくりの仕事にかゝり

ますが、豆の種子を蒔くのも、やはりその頃

です。そしてその頃になるとよくこの「かつぼう鳥」が啼くのです。

かつぼう

かつぼう

かつぼう……

かういつて「かつぼう鳥」は啼きます。お

天氣のいゝあつたかいやうな日に啼くのです

が、それがやさしい聲で、野原の向ふの方か

ら聞えて來ます。

「おや、かつぼう鳥が啼くよ。ぢや豆を蒔く

かな……」

「ほんとにね。うちでも今日蒔かう。」

かういつて、私の家でも、となりの小母さ

んの家でも、今日は豆の種子を蒔くことにします。まづ學校へ行かぬ子供は、お父さんやお母さんにくつゝいて、一しよに遠方の畑へ出かけます。

かつぼう

かつぼう

かつぼう

………

畑にゐるうちも、「かつぼう鳥」の聲は、やはり野原の向うの方から、晩方になるまで續

落下傘の元祖

パラシート（落下傘）の元祖はフラン
ス人シモン・ド・ルブリエルだと云はれて
ゐる。この人は今から百五十年程前に編
傘のような骨に紙と布を張り合せた落下
傘を作つて高い所から飛び降る實驗をや
つたそうだ。我國でも昔からかう云ふもの
を考へてゐた人は澤山あるやうで、有名
な京都知恩院のやぶれ傘は、實は一種の落
下傘で、高い所で仕事をする場合、萬一足
なぞ踏み滑らした時の用意にあの傘を持
つて上つたのだと云ふ。

いて聞えて來ます。

「ほう、啼くわい……」

豆を蒔きながらも、お父さんは感心したやうにこんなことを言ひます。

では、どうして、豆を蒔く頃になると、「かつぼう鳥」は啼くのでせう？ お母さんやお祖母さんの話を聞くと、それにはかういふわけがあるのです。

むかし／＼、このへんのある村に、一軒の百姓家がありました。そこにはお母さんと小さな子供とだけが住んでゐました。その子供の名は「かつぼう」といふのでしたが、お母さんは大それた大事にして、可愛がつてをりました。

ある年、雪が消えて春になりましたが、お母さんは、近所の百姓たちと一しよに、一心に畑の仕事をしてをりました。そしてある日のこと、お母さんは、

「今日は豆を蒔かう。」

といつて豆の種子を持つて、畑へ出かけまし

たが、その時、子供の「かつぼう」も、お母さんと一しよに、豆畑へ出かけました。

お天氣のいい日で、お母さんは一心に豆を蒔きました。「かつぼう」は、畑で大人しく遊んでをりました。

やがて晩方になりました。豆はすっかり蒔いてしまひました。

「どれ……歸つておまんまにしやうかね。」

かうお母さんはいつて、「かつぼう」を連れて、お母さんは畑から歸つて行きました。

お日さまは西の方へはいつて、野原は暗くなつて行くところでした。はだしで後からついて来る「かつぼう」の足音が、びたびたびた／＼と、お母さんの耳に聞えてゐました。

間もなくお母さんは、家へ着きました。

これから御飯の支度をしなければならぬので、お母さんは、鍬を門口へよせかけて、脚絆をぬぎにかゝりました。そして片方の脚絆をぬいで、ひよいとふり返つてみると、「かつぼう」の姿が見えません。

「かつぼう……」

とお母さんは呼びました。

返事がありますね。

「かつぼう。かつぼうや……」

と、お母さんは少し心配になつて、大きな聲

で呼びましたが、やはり返事がありませんね。

お母さんは、土間にも、臺所にも、門口に

も「かつぼう」の姿が見えないので、あはて

て道のところまで出て見ました。

やはり「かつぼう」は見えませぬ。

さつき畑から歸つて来る時は、たしかに後か

らくつゝいて来て、小さいはだしの足音が、

びたびた／＼／＼としてゐたのですから、畑

から歸つたに違ひはないのですが、どうした

のでせう？

「かつぼうー！ かつぼうやア……」

お母さんは、もう一度、よく氣をつけて家

のなかをしらべました。それから、家のまは

りをよくしらべました。やはり見えませぬ。

それで、お母さんは、道へ出て、それから、

さつき歸つて来た道を、畑の方へ、

「かつぼうウ……かつぼうやア……」

と叫びながら、戻つて行きました。

「かつぼう……かつぼうやア……」

お母さんは、とう／＼、豆畑まで来てしま

ひました。

「かつぼうー！」

お母さんは、大分くらくなつた畑を、隅か

ら隅まで探しましたが、「かつぼう」の姿は見

えませぬ。

「かつぼうー！」

お母さんは、となりの畑をしらべました、

居りませぬ。そのとなりの畑をしらべまし

た。やはり居りませぬ。

「かつぼうやア……」

畑は、だん／＼に暗くなつて来ました。

そろ／＼うす寒くもなつて来ました。

お母さんは、腰をかゝめて、顔を地面にく

つゝけるやうにして、畑一面をすかさやうに

して見まはしました。

「かつぼうやア……」

お母さんの額には汗が出て来ました。

お母さんは、畑から畑へ、それから山の方

金物蒐集集

田村 辰三

『あれー！ 又坊ちゃんが釘をお抜になつ
たんですか』



へ、それから村の方へ、それからまた畑の方へ、それから川の方へと、飛ぶやうに走つて

「かつぼう」を探しました。

もう、すっかり夜になりました。

飛ぶやうに走つてゐるお母さんの姿も、もうすっかり見えなくなりました。

そして、子供を呼ぶお母さんの聲

だけが、

かつぼう

かつぼう

かつぼう

……

と、いつまでも聞えてゐました。

そして、それきり、お母さんはも

う歸つて来ませんでした。

お母さんは、探しても探しても「か

つぼう」が見つからぬので、あまり

悲しくて、とう／＼鳥になつてしまつたので

す。

それからといふもの、春が来て、豆を蒔く

時節になると、鳥になつたお母さんが、畑から畑へ、森から森へと、見えなくなつた子供

かつぼう

……

と探してあるのです。

さうして、最初お母さんが家へ歸つて来た時、土間で片方の脚絆を取つたなり、そのまゝ畑の方まで探しに行つたので「かつぼう鳥」は今でも、片方の足にだけ脚絆をはいてゐるのです。

かつぼう

かつぼう

かつぼう

……

「ほれ、かつぼう鳥が啼くよ。豆を蒔くかね……」

これが、お母さんとお祖母さんとの話した「かつぼう鳥」の話ですが、私は母さんやお祖母さんから聞き、お母さんやお祖母さんは、そのまたお母さんやお祖母さんから聞いたのです。私も今、それを皆さんにお話しするので。



かつぼう

かつぼう

迷心

中野 尅子

私の隣村に、伴二人を出征さして、其二人を共に戦死した、お氣毒なお父さんがあります。其のお父さんが

「私が、毎朝缺かさず、氏神様へ参拜して伴達の武運長久を祈つてゐるのに、私の家ばかり、二人共、戦死するとは何といふ不運な事だろ。お國の爲めとは云ひながら、餘りにも歎げかはしくて溜らぬ。本當に神や佛もあるものか……もうお詣りする氣もせぬ」

と、いふて、神様や佛様をまで怨み、狂人のようになつてゐられるそです。それで何と云つて慰めたらいいか、聞かして呉れと云ふて來られた方があります。私は

「成程、お氣毒ですネ。全く、かねてから覺悟はしてゐるものゝ、實際、その場合になつたらそでせう。けれど其人に限つた事ではないが、私達でも、若し、そういう不幸に打たれると、全く、神も佛もあるものかと呪ひたくもなるが、その場合それは、神や佛が無くなつたのでもなく、本當は「自分の信仰」が無くなつたのですネ。今迄の一生懸命に「たのみ込んで」ゐた自分の信仰に、グラ／＼と地震が來て戦が入り、もう其の「信心」が使へなくなつた。それで「自己の破滅」なんです。自己信仰の瓦礫なんです。神の破滅でも、如來様の遁走でもありません。それが、自分の今迄の信心のし方が悪るかツたとも氣がつかぬものだから、呪ふべきは自己の信仰情態であつたのに抱はらず、佛様の方を呪つてゐるのです。如來様の身になつて見れば、いゝ濡れ衣で、お迷惑な次第です。けれ共、如來様のことだから、まあ赤坊でもあやす

ような氣になつていゝわ／＼、其の内にわかるのだからと云ふて、ニコ／＼してゐられることだらうと思ひます」。

など、申上げて参りました。

一體、信仰／＼と云ふが、信仰といふことは、どういふ事なソでせう——。何でもコチラの注文を澤山、神様や佛様の前に並べて、それを皆、諾いて貰ふことかのように思つて居ります。そしてソレが、諾き届けられて、思ひが契ふと、所謂「御利益があつた」といふて喜ぶ。而しソレは本當の御利益でも何でもあります。初めから願つてゐる「願ひ」の仕方が「慾で——」願つてゐるのだから、そんな「慾が」届き、「慾が」通つたからとてソレが極樂の方へ行つたのでなく、ます／＼地獄の方へ入り込んで行つてゐたのです。

反對に、自分の「思ふ通り」に運ばなくとも、ソレは如來様が諾いて下さらなかつたのでも、或は「罰を——」當てられたのでもありません。初めから「煩惱」なソだから、そ

んな煩惱の末通らう譯がない。だから、思ひが聞かれなかつたといふて、神佛を怨むのも間違ひなら、或は罰が當つたと云ふて、神佛を怖れるのも間違ひです。そんなものは神の信心でも、佛の信心でもなく、「凡夫の迷信」なんです。「人間の迷心」なんです。私共の「勝手信心」です。如來様の知つた事でもなく、神の關した事でもなく、勝手に迷つて勝手に歎き、勝手に願つて勝手に喜んでゐるのです。信仰が深まつたのでなく迷ひが深くなつたのであり、助かつて行つてゐるのではなく、ますます迷つて行つてゐるのである。だからドン底までドーンとブツつけた時は、狂氣か自殺か、咒咀か自暴、或は獨り天狗の野狐禪になつてゐるか、お金をドツサリ献げて得々としてゐる「信心家」です。これも高慢地獄の頂上で、迷雲の中へ頭を突込んでゐる。

だから、斯ういふ信仰が、普通常識からさへ非難されて、宗教が排斥される口實になつてゐるが、本當は、斯んなものは「宗教」の部類へ入つてゐるのも何でもなく、斯んな

「御信心家」がどれ丈け殖えたところで、又どれだけ馬脚を露はしたところで、或は斯んな神々がいくら轉落したところで、それは眞實なる「宗教」の破滅でも、退陣でもありません。却つて、眞實なる宗教の光りの増す時である。凡そ、そういふ信仰は信仰でもなく初めから「迷ひの塊」であつたのです。

それぢや本當の信仰といふのは、どういふのかと云へば信仰といふのは、字でも信—仰—といふのだから、仰いで高く天地の眞理—如來の法を信ずるのです。

コチラを如來さまの「お慈悲」の方へ合はして行くのです。佛を「凡夫の心」の方へ合はすのではなく、凡夫を「佛の心」の方へ合はすのです。それではなくては仰いで信ずることにはならぬ。それを「天の法」を地上へ引降り下ろして「地の法」としよとする。それぢや間違ひです。地を「天の法」に合致せしめて、地上を天國化することこそ「神國の建設」です。所謂成佛國土、成就衆生です。私達の間違つてゐた熱情が、佛の光りに照

らされて、成程、「誤つてゐた——」と懺悔せられて、

「ア、今迄は申譯ない願ひ事ばかり願つて居りました。

今度の不幸で、初めて目が覺めて、初めて本當の信仰にして頂きました。それを通して、思へば、此の不幸こそ、眞實に引き入れて貰いた、よき御恵みで御座いました」と、今更らのように目が覺めて感謝せられるのでなければなりません。

そして生活が筋立ち、一々誤りが訂正せられて正確となり、健實なる努力によつて着々奏効して、精神的にも肉體的にも、經濟的にも人格的にも、又個人的にも、國家的にも、社會的にも、人類的にも、均整のとれた、全般的發展向上が遂げられるのであります。

だから、宗教は、決して個人的身上に關した事ばかりでなく、況んや「精神上の問題」など、限られたことでなく、人間全般、人類全體の文化水準の高度化されてゆくことでもあります。



千姫と出羽守

今野賢三
田村辰三畫

(一)

二度目に、家康が大阪城を攻めたのは、元和元年の四月であつた。

そのころ、家康の孫の千姫は、秀頼の北の方として、十八歳の美しいさかりであつた。

或る日、城内の料理方、佐々孫助といふものが、家康の軍に内應して、城中に火を放つた。このときはもうすでに、大阪方の敗色があきらかになつてゐた。

『なんといやる？ 明石掃部も、眞田幸村も、みな討死したとか』

急の知らせに、愕然として、顔色を變へた

のは淀君であつた。

『火事でござります！火事でござります！』
かう叫びながら、櫓の下から、つゞいて、
一大事の知らせのものが駆けあがつた。

『えッ、火事ぢやとの』

淀君は、さらに、驚きの聲を張りあげた。
大野治長も驚きのあまり、はねあがるやうに突立つて、遙に下をのぞいた。

『お、これは一大事にござりまする』

治長は青くなつて叫んだ。眼下にはもう、
濃い煙りがひろがるなかゝら、蛇の舌のやうな
火焰がひらめいて、此の櫓にも間もなく燃え
えうつりさうに見えた。

『これは、ちつともはやう、お逃げにならねばなりません』

『いまさら逃げてどうなる！』

秀頼は、溜息を吐きながらひく、呟いた。

『申上げます。敵は、城の四方に攻め入り味方はみな、どこへか、逃げ失せる様子でござります。たのみがひのない浪人どもが』

老臣の一人が、息をはづませながら駆けつけて、淀君と秀頼の前にひれ伏し、齒を喰ひしばつた。

『どこか、のがれる道は？』

治長は首をのぼして訊いた。

『その間道も……味方に内通するものがあつたと見え』

『どこも、敵の手が？』

『ハッ、蟻の這ひ出るすきも』

『ないといやるか！』

不意に、淀君は氣狂ひじみた聲を張りあげてから、

『アーツ』

ふかく、消え入るやうな溜息といつしよに

茫然として、くづ折れてしまつた。

一瞬間、首を垂れ、眼を閉ぢてかんがへこんだ秀頼は、両手で熱くなつた臉をおさへて

から、やうやく決意の首をもたげて、

『母ぢやひと！ もはやこれまで……』

自害よりみちがないと、覺悟の表情をハッキリとあらはした。

『もし！』

驚きの瞳をあげて、かたはらから氣づかはしげに秀頼の顔を仰いだのは千姫であつた。

その刹那に、

『待ちやツ』

と、淀君がにく／＼しげに叫んだ。

『これ、千姫！ いまとなつてはそなたも敵の片割れ』

『なにを言やる。母ぢやひと』

秀頼が口を入れた。

『申上げます』

また、大音聲で下から叫ぶ聲が聞えた。

『いつときも早う、お立ちのきならぬと、お

やぐらも焼け落ちます。此の火事は』

『此の火事は、どうした？』

『敵に内通して、味方のものが火を放つたものに相違ござりませぬ』

『しかと左様か？』

『ハッ』

櫓の下から、逃げまどひ、救ひをもとめる女たちの叫喚が、手にとるやうに聞えてきた。

『につくいやつめが！ 内通したものは、こ

こにもゐやるぞツ』

淀君は、懷劍をさか手に、いまにも抜き放ちさうにして、唇をふるはせ、まなじりを

釣りあげ、額に青すぢをうかべて千姫を睨みつけた。

つぎの瞬間、左右に居ながれた侍女や、家臣どもが、『アツ』と聲をあげる暇さへなかつた。

秀頼は默然と、肌をおしひろげるよりはやく、短刀を脇腹に突き刺して前へ突伏して

しまつた。誰も止める暇がなかつた。

『はッはやまつたことを……』

淀君にはもうつぎの言葉がつかなかつた。『ワアツ』と、前後も忘れ、半狂亂のすが

た。

たで泣き聲を張りあげると、

『えゝッ、につくい女が……』

右手に懐劔を抜き放ち、よろ／＼と立上り胸元を一突きにと、左手で千姫へつかみかゝつた……

(二)

茶臼山の本陣で、采配を揮つてゐた家康が城内から煙のあがつたのを見ると、急に突立ちあがつて、注意ぶかく眼を据えた。

刻々、煙がひろがり、高／＼のび、火焰の舌を吐いて、大火に變つてゆくのが手にとるやうに見えてきた。

『うむ、やつたな……』

家康はひとりごとを言つて莞爾としたが、すぐそのあとから、不安の眉を寄せて、左右を見まはした。

『姫を助けねばならぬぞ』

ひとりごとのやうにかう言つたものゝ、誰も、これに應ずるものがなかつた。なにしろ勇將はみな、さきを争つて前線へすゝんで戦

つてゐたし、また、家康の左右のものは、主君の身を氣づかつてすぐその場をはなれるわけにはいかなかつた。さうして誰もこたへないので、家康はいら／＼して、丈の低い肥つた身體をゆすぶつて大音聲を張りあげた。

『姫を助けるものはないか。助けたものには姫をくれるぞッ。誰か千姫を助けぬか……』

その聲は十七八町も聞えるといふのだが、前線の勇將のなかから、この聲を聴いて、すぐにも城内の火中へ駆け込んでゆかうといふものは一人も見えなかつた。

家康はます／＼いらだつた。

火焰は、いまにも、遠くにそびえてゐる櫓までも焼きつくしさうに見えた。

そのとき、馬を飛ばして本陣へ駆けつけた一人が、四五人の家來をうしろにしたがへて馬から飛び降りるよりはやく家康の前に平伏して言つた。

『姫君さまを、お助けにまゐりまする』

『誰ぢや？』

『坂崎出羽めにござりまする』

『うむ！ はやく行つて助けてくれ』

『恐れ入りますが、お助けできませんでしたら、拙者にくださるとのお言葉に、しかと相違は？』

『家康がいつわりをいふと思ふか』

『ハッ、ごめん……』

岩見國、津和野の城主、坂崎出羽守孝親は小身の外様大名で、年齢もまだ若かつた。よろこびに、をどる心を風のやうに乘せて駿馬に鞭をくれた。家來は汗をふき／＼つづき、馬は砂煙蹴つて一直線に走つた。

へ此のときをのがしてはならぬぞ。外様大名とのけものにされ、小身であまんじてゐたわが身に、今こそ、出世のよろこびが湧いたのだ。大御所の一言に千鈞の重みがある！ なんの疑つてよいものか。一命に替へて、姫をお救ひ申さずにはおかぬ！

心で叫ぶ聲に、眼はかゞやき、みちくる勇氣に、總身の血が鳴りひびいた。大刀を頭上にふりかぶり、大阪方の將兵がまだ群をなし、て鐵砲や槍を向けてゐるなかを見る／＼うち、にふみにじり、突き切つて、また／＼間に、

目指す奥の櫓の下にせまつた。

そこら一面の建物はもう、煙と焰のうづまきで、近よる事ができないやうに見えた。

しかし、孝親は屈しなかつた。

家來に馬をあづけると、突嗟に薄い煙の下



を這ふやうにしてすゝんだ。

櫓の下の大戸は穴のやうに口を開いてゐた。孝親が、その開いてゐる入口から身をくぐ

らして飛び込み、すさまじいひびきをたてゝ、すでに火焰をあけてゐる左右から、煙のうづ

まく天井へと眼を放つ

たとたん、一隅の大

きな梯子のうへから悲

鳴が聞えて、三四人の

女のひとかたまりがこ

ろげるやうに駆け降り

た。一人が倒れると、

そのうへに朱具足、朱

鞆の大小を帯び、背に

黒髪を亂したほかの女

が折重なつて倒れた。

孝親が駆け寄つてみ

ると、みな恐怖に打

たれ、煙にむせび、苦

しげに身をもがいた。

『千姫殿はどこに居ら

るか？』

孝親が聲を張りあげて訊いた。

『ハッ、ハイ、こゝに、おいでになります』

一人がかすかに言つた。

『おゝ、そこに居らるか？』

『千姫さまはこゝに……』

『徳川の御本陣から、おすくひにまゐつたも

のぢや。どなたが姫君か？』

一人の老女が、うつ伏しになつて倒れたま

ま、首をもたげて自分の背中を指さした。背

に負はれたまゝ、首をちからなく前へ垂れて

ゐる、ひとときわあでやかな姿は、千姫に相違

なかつた。

『ごめん！』

かう叫んで、抱きあげながら、

『もし、お氣をたしかにお持ちなされませ。

茶臼山の御本陣からお救ひにまゐつた坂崎出

羽にござりまする。御安心なされ……』

耳もとでよばゝりながらゆすぶると、一時

氣を失つたものと見えて、やつと眼をみひら

いた。淀君に突き刺されようとした恐怖と、

煙にむせんだくるしみとを、そのまなざしに宿したまふ、放心したものゝやうに孝親の顔を見つめた。

『いつときもかうしては居られませぬ』

孝親は叫んだ。

ふりかへつて見ると、いま這入つたばかりの入口には、もう煙がのびて、太い柱をなめまはしてゐた。濃い煙がそこにうづまき、一刻を争ふ危険が感じられた。

『ごめん下され……』

孝親はまた叫んで、両手の中にしつかりと抱きしめて立上つた千姫の頬と黒髪が、孝親の顔へまつはり、肩へ力なく落ちかゝつた。

が、そのまゝ走り出すわけにはいかなかつた。千姫の髪に、衣服に、火が燃えうつつては一大事であるから、これではならぬと思つた。突嗟に自分の兜を千姫のあたまに載せて子供のやうに軽と背負つた。

(三)

大阪落城後、いつたん江戸へ出て、それか

ら津和野へ歸つた孝親は、千姫のことばかり思ひつゞけるやうになつてゐた。歸つた當時の、家來たちのよろこびは非常なものであつた。留守のものも、出陣したものも、みな歡喜の聲をあげてゐた。

『わが君が將軍家の御掣君となれば、われわれとてもこんな貧乏ぐらしをしなくともすむことはわかりきつたはなしだ。譜代の大名名の列にくはへられ、大國へお國替になるかも知れぬぞ。さうなると、當然、われ／＼にも御加増にきまつてゐる。幸福がやつてくる。いまから祝つておけ。さすが、わが君はお偉いのう』

かう言ひ合つて、上から下まで、夜も晝も酒宴をひらき、有頂天になつて酔拂つた。小身の外様大名では、貧困と不安がつきまとうものであつたから。

『このたびは、拔群のおはたらき、御目出度うござりまする……』

重臣たちは、酒濁りの眼で、孝親の機嫌うかゞひに出た。

『うむ！ これで當家は安泰ぢや』

孝親も、半面が火傷のあとで痣のやうになつたみにくい顔の相格をくづして笑つた。

重臣たちは、その主君の顔がみにくくなつたことなど問題ではなかつた。

『まだ、江戸屋敷からたよりはなないか？』

『ハツ、御興入れの日も、ちかく、おきまりのことかと』

『將軍家も、いそがしからう。大切な姫のこと、うちすてゝおくわけでもあるまいが』

『ごもつともでござりまする。わが君の、御心中は御察しいたしますが、ちかく、吉報がまゐるか』

『余も、さう思つてゐる』

『御安心なされませ』

『うむ。待ちどほしいことぢやて』

『姫君さまとても、さぞや、御待ちに……』

『それは、どうかのう』

『いゝえもう、おいのちの恩人のことを、な』

んで忘れてよいものでござりませう』

『忘れぬかな……さうか』

『お忘れにならぬのが人情かと』

『うむ、さういはれるとうれしくなる。姫とてもさうあらう。いや、うれしくてたまらぬぞ。誰か、酒をもて』

かうして、孝親も酒宴をはじめると、重臣はまた『おながれ頂戴』で、さらに、酔拂つてろれつがまはらなくなりながら、

『お目出度うござります』を連發した。

この年の十二月になると、江戸屋敷から報告がきたが、それは、大阪陣の論功行賞を内

内知り得たが、わが君には、なんらの恩賞もないらしいといふのであつた。

この書狀を見た孝親は、不平らしい憂鬱な顔を見せ、すつかり不機嫌になつたが、

『わが君への御恩賞は、姫君の御興入れといつしよでござりませう。また或は、姫君の御興入れをもつて、御恩賞といふことになるかとも思はれます。いや、それではすまぬはすでござります。きつと、大々名にお取立て相違ござりませぬ』

家老の坂崎勘兵衛が慰めると、孝親もすぐ

その氣になつて、あかるく眉をひらき、うれしさに笑つた。

さうして、孝親も家臣も、今日か明日か御興入れの通達をひたすらに待ち、江戸屋敷の家老にも、それとなく將軍家の意向を探らせたが、ちつともそのけはいがないといふのであつた。家臣はけいんの眼を見交し、孝親はいらくしてきた。

すると、年が明けてまもなく、千姫は、本多忠勝に降嫁ときまつたといふ急報が江戸屋敷からとび込んできた。(續く)

S.S.S.

國產代表基準品

サンエス・萬年筆



近代工場が完成した
精巧な萬年筆ですノ

ペンを酷使用する

方々におすゝめ
します

¥2.00以上各種

婦人と家庭の浄土

月影のいたらぬ里は
なけれども
ながむる人の
心にぞすむ

銃後のつとめ

牟田口部隊長夫人 牟田口敏子(談)

去る日記者は浄土宗主事矢島春道師に随行して、笹塚に牟田口部隊長夫人をお訪ねしたが、寡言な夫人がつましましやかに、語られる中から次のやうなお話を承つたので、銃後婦人の心得の一端とも存じて、掲載させて頂くことにしました。

昨年事變が起りました當時、主人は支那に駐在してゐたのでございました。まさかあの様な事件が起らふとは夢にも思ひませんし、事變がこの様に擴大しようとも思ひませんで

した。

勿論主人は一身を御國の爲に捧げてありますので、何時何處で敵彈の爲に戦死を致すやうにも分りません。その様な時の覺悟は致してゐる積りですけれどやはり事變が起りましてこの方寝ても覺めても戦場にある主人の事がそれにもまして主人の部隊の方々の生命が案ぜられてなりません。

部隊の方々が戦死された報に接しては主人の戦死と同様に悲しまれるのです。

昨年主人が單身敵兵の中へ眞先に切り込ん

夏ものゝしまひ方

▽外出着のしまひ方 お召や紺縮緬な

どのやうなものと明石、ジョーゼットなどのやうな、薄物、上布類など、みな區別して一々間に紙を入れてしまひます。

薄物はなるべく下積にならぬやう、明石のやうな、しやきりとした布質のものは、肩山、袖山に、薄い紙か眞綿を伸ばして、内側から當てゝおくとよろしい。

單帶はたゝむと折目がつきますから、帶棒に巻いておきます。

▽入替のとき ちよつと見たのでは、汚れてゐないやうでも、眞夏に着たものは、よく着たときのことを考へて、汚になつたものなら、洗張りをした方が安全です。

着ずにをはつた式服なども一度風を通してから、冬物と入替へます。

單物を、ドライクリーニングに出すことは間違つた考へです。何故なら、汗は

だと言ふ新聞の記事を見まして、漸く部下の勇士に對しても之で面目が立つたと言ふ様な安堵の氣持と同時に、部隊長の重責にある主人が、今後こうした行をしない様にとも祈るのでございました。

主人は唯今滿洲の方に參つておりますが、やはり元氣で軍務に精勵致してゐます。いつも戦線の主人から戦死された部隊の方々の英靈を弔ひ、遺家族の慰問につとめる様にと言ひ送つて参ります。主人の今日あるのも皆部下の方々のお蔭は申すに及ばず、戦線に銃後に共に祖國を守る尊い國民の協力によるものと篤く感激致しております。戦線は次第に擴がつて來た様でございまして、國內の狀態も事變一週年を迎へました今日此頃は、皆さん眞剣に國策の線に添ふて銃後を守つてゐる有様で誠に結構の事と存じます。

男子の方々は、追々戦線に参りますし、又參る準備も致さねばなりませんから、應に婦人のつとめが重大となつて参ります。男子に代つて家庭の事は勿論社會的にも進出して

働かねばならぬ時期が参つたのだと思ひます。

かう云ふ方面での婦人の仕事は仲々ゆるがせに出来ぬもので、餘程緊張した氣持でやらねばならぬ譯で御座います。

物資の統制、節約、貯蓄報國など申すに及ばぬ事でございます。

然し日一日と時局が深刻になつて参りまして、いよいよ銃後の國民一同がしつかりとつとめておられます様で誠にたのもしい限りでございまして。

殊に上ついた婦人の虚榮虚飾なども目につかなくなりしました事も、それだけ婦人の時局に對する考へが深くなつたせいかと存ぜられます。

戦線にある勇士の勞苦を考へますれば、銃後にあつてどんなにつらい勤めでも甘んじて果さねばならぬと決心致します。

皇軍の武運長久と、戦没將兵の御靈永く安らかに靖國の社頭に鎮りまさん事を心からお祈り申し上げる次第でございまして。

水を通さずに落ちるものではありません。

▽ふだん着もの しまひ洗ひのものは糊をつけずによく乾してしまひます。

夏物は、まづとつつきの單物から、眞夏の薄物、ネルやセルの合着といふやうに、階段がいくつもありますから、それぞれ季節に分けて、要らなくなつたものから順々に洗つてしまひます。

▽麥藁帽子 脱いだら、使ひ古した手で拭で結構ですから、拭つて埃を落しておく。かうすれば、小々雨にあたつてもひどく汚點を拵へることもなく済みます。

▽本パナマ なるたけ洗濯に出さないやうにすること。極く軟かい齒ブラシに水をつけて、徐かに擦りながら、汚れをとるやうにします。消ゴムを使ふのもよいですが、あまり強くゴシ／＼擦らないやうにします。しまひ方は蟲がつくと云ふことはありませんから、普通の箱に入れて、新聞紙に包み濕氣のないところへしまつておいて下さい。

支那時文釋義

道 西 澤 寬

〔九〕交通界消息、安慶以上之各處電報桿綫、均被大水衝壞、蕪漢間之來往電報、發生影響、皖省電政監督、刻正派員、設法修理。

〔訓譯〕 交通界の消息。安慶以上の各處の電報桿綫は、均しく大水の衝壞を被り、蕪漢間の來往電報は、影響を發生せり。皖省の電政監督は、刻、正に員を派して法を設けて修理せり。

〔通譯〕 交通方面の消息に據れば、安慶（安徽省）に在りて、揚子江に臨むから上流の各處の電報の電柱、電線は、均しく大水の爲めに衝突破壊されたので、蕪湖、漢口間を往復する電報は、その影響を起した。安徽省の電政監督は、現在、正に人を派遣して、方法を設けて修理してゐる。

〔摘解〕 ○桿綫 電柱と電線。○蕪漢 蕪湖と漢口。○皖省 安徽省。

〔二〕漢口二十六日電、北平廿三日開快車、廿六日午前始到漢、當晚照常北上、聞貨車即日可恢復原狀。

〔訓讀〕 漢口二十六日の電。北平二十三日開の快車は、二十六日午前に始めて漢口に到り、當晚、常に照られて北上せり。聞く、貨車は即日、原狀に恢復すべしと。

〔通譯〕 漢口二十六日發の電報に據れば、北平を二十三日に發した急行列車は、二十日六日午前に始めて漢口に到着して、その晩に平常通りに北上した。聞く所によれば貨物列車は、即日、原狀に恢復することが出来る云ふ。

〔摘解〕 ○開 發する。○快車 急行列車。

特別急行列車は特車、普通列車は慢車と云ふ。○照常 常に照して。平常に照し合せて、平常通りに。

〔二〕林西北方八百里地點、烏珠穆沁旗地方、有外蒙古兵出沒之風說、致林西地方人心動搖。

〔訓讀〕 林西の北方八百里の地點、烏珠穆沁旗地方は、外蒙古の兵の出沒するの風説ありて、林西地方の人心の動搖を致せり。

〔通譯〕 熱河省林西の北方八百里の地點と察哈爾省の烏珠穆沁旗地方では、外蒙古の兵が出沒するといふ風説がありて、林西地方人心の動搖を來たした。

〔三〕遼遼開魯一帶、胡匪猖獗、近月以來、長途汽車被劫十餘次、且不時搶掠城鎮、俄毛皮商被綁二名、勒贖十萬元。

〔訓讀〕 遼遼、開魯一帶は、胡匪猖獗にして、近月以來、長途の汽車劫かざるゝこと十餘次、且不時に城鎮を搶掠す。俄毛皮商は、二名を綁はれて十萬元を勒贖せられた

り。

【通譯】 奉天省の通遼、熱河省の開魯一帶では、胡匪が兇暴で、近月以來長途の自動車自動車の劫おとしかされたことが十餘度で、且つ不時に城鎮城鎮を搶掠ソウリョウしてゐる。露西亞の毛皮商人は、二名を人質ヒトジツとしてさらはれて身代金十萬元を強要キヤウヨウされた。

【通譯】 ○汽車 自動車。○綁 人質ヒトジツとしてさらふ。○勅 督促強制の意。○贖 身代金シロギンを拂ふ。

(三)武漢宣布戒嚴、戒嚴期內、不准自由開會聚衆遊行、夜間十一時後、無口令不准通行、違者軍法從事。

【通譯】 武漢は戒嚴を宣布し、戒嚴期內は、自由に開會し、衆を聚めて遊行ヨウギョウすることを准さず。夜間は十一時後、口令なければ通行を准さず、違ふものは軍法にて従事す。

【通譯】 武昌、漢口では、戒嚴令を宣布し、戒嚴期內は、自由に開會したり、群衆を集めて示威運動シイモウドウすることを許さず。夜間は十

一時以後は、合言葉アヒゴトがなければ通行することとを許さない。違叛者は、軍法によつて處理する。

【摘解】 ○遊行 示威運動。○口令 合言葉。

(四)廣州當局、嚴拿拒用中央紙幣者、昨日起兌換銀店、多自行休業、市民直接持紙幣、赴中行兌現頗多。

【通譯】 廣州當局は、中央紙幣を用ふることを拒むものを嚴拿せり。昨日に起りて、兌換銀店は、多く自ら休業を行ふ。市民は直接、紙幣シヘイを持つて中行に赴きて兌現ダイゲンせしもの頗る衆し。

【通譯】 廣州當局では、中央紙幣を使用することを拒絶したものを嚴重に拘捕した。昨日から兩替屋は多く自ら休業を爲したので、市民は直接紙幣を持つて中央銀行に赴いて現金に兌換したものが大變に多い。

【摘解】 ○廣州 廣東省の省城たる廣州を

指す。○拿 撃に同じ、拘捕する。○兌現 現金に兌換する。

もてるのろじお 當世風俗學

★停留所またはプラットフォームで首を長くして戀人にでも逢ふやうにして待つてゐたのに、電車は着くや否や、もう發車することを考へてゐる。そこに待つ人々が大體(大體ですゾ)乗つたと思ふやチン／＼またはビリ／＼と来る。だから片足かけそくなつて危く抛り出されたり、鼻の頭をドアに挟まれそくなつたなどはめづらしくない。故に、電車彼方より來ると見れば先づ待機の姿勢しせゐを採るべし、人をかき分けても先きに乘るべしと云ふことになる。近頃の人間が落着かなくなるのも無理ではない。★電車、バスなどで空いた席があるのに、人の前立にちふさがつて釣革と腕押しをしてゐる人がある。前の席の人は甚だうつたらしい。ばかりではない無駄にエネルギーを勞費するのは事節柄面白くない。殊に前に見るべきケシキなどある時は一しほ不愉快である。

法語
解説月つきに光ひかるこゝろ法はふ然ぜん上しやう人にん詠えい歌か

中村 辨 康

月影つきかげのいたらぬ里さとはなけれどもながむる人ひとのこゝろにぞすむ

—— 續千載集 ——

月つきに照てらされて月の光ひかりは美しくなつかしいものです。ことに秋あきの月光げっこうは澄み切つて何かしらシミジミとした感銘かめいを興おこへます。空そらに一點いっでんの雲うみもなく柔らかな光ひかりを隅すみなく照らして居るところ、地上ちようじやうに在る一切いっけつを美化びやうかして私照ししやうなきところ、父ちちの如ごとき苛烈かれつな日光にっこうに引きかへて母ははの慈愛じあいにも似た和やかさを興おこへるところ、ともすれば外形的なことにのみ走りたがる人の心を内觀ないくわん的に導き行くところ、其處そこに秋の月つきならでは感じられない、シンミリとしたなつかしいものを感じさせられます。太陽たいやうに道徳的な感じがあるとするれば、秋の月つきには實に宗教的な感覺かんじがあります。月つきを見て思おもひを千々に碎くと云ふこともあるにはありませうけれども、夫それは愁おもしみや惱なやみにとざされて居る時であつて、決して平常な健全な姿ではありますまい。それよりも、月つき見る人ひとの心をかくあらしめるところの原因たるべきもう一つ奥の或ものを感じて行きたいと思ひます。

つまり宗教的な感じです。

口ではハツキリ云へませんが、清きよいとか和やかとか物悲しいとか云ふものよりも、もつと奥深い不變なるものへの憧憬とか天地永遠の眞理への信順とか云つたやうな幽玄な感情に浸ることは、月見る

人をして一層高潔な人格を養ふものではないでせうか。

月を見て遺瀾ない戀に泣く人もあるでせう。また愛する者との別離に感慨無量なるものを覚える人もあるでせう。

然し、月の光の中に如來を感じて、月を通して如來の光明を欣慕することゝ出来るものは本當に幸せだと思ひます。

世の中には闇黒を感じる人の方が多いやうです。

それも光の半面を感じつゝ半面の闇黒に泣くのであるならば、其處には光への憧憬があり向上があるのでやがて開け行く喜びもあらうと云ふものですけれども、闇黒とは知らずに闇黒に閉ぢこめられて唯だ泣いて居るのみでは、その悲歎はやがてまた其人の心を萎ましめ蝕ばましめてしまひませう。悲しいことです。

月は決して人々の心を暗くする爲に光つて居るのでないと思ひます。

自然は山も川も森も藥屋も皆んな美化されて、淡い月光に繪となり詩となつて居ります。

だから人の心もやはり詩となり繪となつて美化されて行くのが本當ではないでせうか。

然も其上まだ一つ問題があります。即ち詩にも色々あり繪にも色々あると云ふことです。即ち拙劣な詩よりも崇高な詩の方がよく、下らない繪よりも香り高い繪の方がよいやうに、私達の詩化され美化さ

れる心も、それが神化され聖化されるまで高められるやうにありたいと思ひます。

法然上人は月の光を如來の慈光にまで味到せられたのでした。

そして御自分の信仰の眼に、月の光から如來の手をさしのばして居る大慈悲を感じ得られたのでした。

そして如來様に抱き取られて居る同信の友の姿をまざまざと見られたのでした。

さればこそ「此世には思ひ煩ふこともなし」との明るい生活が素直に營まれたのであり、敵も味方も均しく名號六字の光の中に包まれて、上人の會下に微笑をかはし得たのもありませう。

月影の中に如來の慈顔を見、月光の中に如來の慈影を眺め得ることは本當に幸せだと思ひます。

光を背にする人生

然るに多くは本當の光明を見ることが出来ないで、徒らに不平をなす。不満足を訴へ不足をかこち不服を稱へて居ります。

これは餘りにもみじめな心境ではないでせうか。

徳川家康公遺訓の中に「不自由を常と思へば不足なし」と云ふのがありますが、それは家康公のやうな其當時に於ける日本第一の富強者であり權力者である人の云つた言葉であるだけに、現代人にはピンと

来ないものがあり「支配者が部下への給與の不足勝たのを道義の名を借りて無理に押へようとした」一種のブルジョア心理からの言葉として軽く見られ勝なところもあるやうですが、それはこちらがひねくれに居るからであつて、本當の自然な現實の姿を知らないからだと思ひます。

全く物質的な欲望には切りも際限ありません。福を得て蜀を望むのは人間の持つて生れた悪い癖です。つまり段々付け上がつて来るのが私達です。

然しかうして得たものは得た時には一時嬉しいやうですが、何處かで抜けて行きます。家族に病氣するものが出来るとか、何か事件が起つて失費することが重なるとか屹度一方で得ても他方へ抜けて行くものです。天地の理法と云ふものはそれが活用される所には集積されて何の障りをも示しませんけれども、單に死蔵されるところに集つたものは必ず他の活用される方へ流動させられてしまひます。一代で出来なければ二代三代かけても他へ抜けさせられてしまひます。

不義の富貴は浮べる雲の如しです。

つまり欲をかいて無理して得た富には永遠性がないのです。

然るに世間滔々として利に走り欲に驅られて、恩に背き義に背き、自ら暗黒の道を求めて流轉して居ります。

何と云ふ淺ましい姿でせう。

「不自由を常と思はず」常により大なる自由を物質の中にのみ得んと

あせつて居るのです。

誠に常に現在の姿の中に不足を感じて居ることは本當につまらないことです。

無量壽經の中には

「世人薄俗にして共に不急の事を諍ふ。此劇惡極苦の中に於て、勤身營務して以て自ら給濟す。尊となく卑となく貧となく富となく、少長男女ともに錢財を憂ふること有無おなじく然り。憂思まさに等し。屏營として愁苦して念ひを累ね慮りを積む。心に走使せられて安き時あることなし。思ひを重ね息きを累ねて憂念愁怖す。横に非常の水火盜怨家債主に焚漂し劫奪せられて消散し磨滅す。憂毒松松として解くる時あることなし。憤りを心中に結びて憂惱を離れず。こゝろ堅くこゝろ固くして適ひて縱捨することなし。或は摧碎に坐りて身亡び命をはりぬれば之を棄擲して去る。誰の隨ふものなし。尊貴豪富も亦たこの思ひあり。憂苦萬端にし勤苦すること此の如し。貧窮下劣は困乏にして常になし。たま／＼一あればまた一を少き、是あれば是を少く。齊等あらんことを思ふ。欲するに適ひて具さにあれば便ちまた離散す。かくの如く憂苦す。當にまた求索すれども時に得ることあたはず。思想して益なし。身心ともに勞して坐起やすからず。憂念あひ隨ひて勤苦することかくの如し」

と云つて居りますし、また

「かくの如きの人、瞋冥抵突して經法を信せず、心に遠き慮りな

くして各々快意せんと欲す。愛欲に癡惑せられて道徳に達らず、瞋

怒に迷没して財色を貪狼す。これに坐りて道をえず、當に惡趣の苦

に更りて生死きはまりて已むことなかりべし。哀れなるかな、甚だ

傷むべし。或時は室家、父子、兄弟、夫婦、一は死し一は生じて更

ひにあひ哀慙し恩愛思慕して憂念結縛し心意痛着して迭ひに相顧戀

す。日を窮め歳を卒へて解け已むことなし。道徳を教誨すれども心

開明せず、恩好を思想して情欲を離れず、昏瞶閉塞して愚惑に覆は

る。深く思ひつらつら計りて心自ら端正にして專精に道を行ひ、世

事を決斷すること與はず、便旋して竟りに至る。年壽をはり盡くれ

ども道を得ること能はず、如何ともすべきことなし。總猥慣擾して

みな愛欲を貪る。道に惑へる者は衆く、之を悟る者は寡し。世間忽

忽として變轉すべきことなし。尊卑上下貧富貴賤勤苦忽務にして

各殺毒を懷く。惡氣窮冥にして妄りに事を興さんとす。天地に遠

逆し、人心に従はず、自然の非惡まづ隨ひて之に興す。恣に所爲

を聽るして其罪の極るを待つ。其壽いまだ盡きざるに忽ち之を奪ひ

て惡道に下し入れて累世に勤苦せしむ。其中に展轉して數千億劫出

期することなし。痛み言ふ可からず。甚だ哀慙すべし」

と痛切に私達の痛い所をつき痛いところをめぐり出して居ります。

是では全く暗黒な世界です。光明がありません。光明を求めんとし

て愈々益々暗黒の道をさまよふのです。

りです。

光に向ふこゝろ

もつと明るい生活をしたいものです。

色々なことに心配せず、孜々として爲すべきをなし、今日唯今を喜

んで行く生活をしたいものです。

それには私の一切を如來様に委せ切つた氣持で居ることが一番だと
信じます。

一體佛教では運命論を否定いたします。

「業力の推移」が一寸「運命」に似て居るやうですが、一定不變の雨

降り式の「運命」は認めません。自分の爲したる「業」の結果が認め

られるだけです。ですから自ら開拓して行ける譯です。しかもそれは

堅だけの「因果關係」でなく、横の「緣起關係」を重視して居ります

から、結果を現象させる有力な條件さへ調へて行くならば、現はるべ

き結果を轉じ變へることが出来るとして居ります。

イヤそれは理論ではなくして事實だからです。即ち悪い子供も改心

を誓ふことに依て其罪を許して貰へることは事實です。

優良な種を蒔いても天候が悪いか手入れを怠つたとかと云ふ後天

的な悪い緣が加はれば良い結果を見ることが出来ないのも事實です。
「因」即ち原因が如何に悪くとも其原因を結果せしむる色々な「緣」

即ち條件の中で、最も強力な「増上縁」を無力とし、他のよい縁を強化すれば、それが「増上縁」となつて善い結果を將來することが出来る云ふのです。そしてそれは事實である譯です。

此事實の上に立脚して生活を調整せしむるのが「道德」であり、其原動力たる「心」を置き替へるのが「信仰」であります。

だから假に運命と云ふやうなものがあるとしても、いくらでも替へて行けるのです。

それでは何うすれば一番よく變へることが出来るかと云ふに、一番強い主力は「我」にあるのですから、其「我」を無力にすればよい譯になります。里子に出された私達が感情的に何うしても「生みの親」に親しめず、却て「養ひ親」の方がなつかしいので、何時迄も「我」を通し我儘の感情のまゝに「産みの親」の方へ寄り付かうともしなかつた其の「我愛」「我見」「我慢」の心を悔い改めて、本當の生みの親である「如來様」の方へ心向ければ、それでよい譯です。そしてそれが一番手取早い方法でもある譯です。

子が親を絶対信頼して「お母様お父様のよろしいやうに」とスツカリ委せ切ることが出来たら、親は一層責任を感じて其子を強く愛し、そして、専心に其子の幸福を念願し色々と計畫して呉れることでせう。それと同じやうに「我」を棄て、如來様へスツカリ委せ切れば、運命などは吹き飛んで仕舞ひます。如來様の方で適當にやつて下さるからです。

無論苦しい時もあるでせう。悲しい時もあるでせう。むしろ如來様ががうらめしいとさへ感ずる時もあるでせう。然しそれは一つの試験であるか、又は何か深い覺召しがあるからであります。ジツと忍従してそれを踏みこたへて行けば必ず強大な喜びに接し得る筈です。夏が暑いからと云つてもそれをジツと忍従するところに秋の實のりが参ります。冬がいくら寒くとも夫れをジツと忍んで居れば、やがて花咲く春も訪れます。

親船に乗つた氣持で一切を眞實の親である如來様に委かせ切つて居れば、やがて幸福な彼岸に達します。

丸切り辛榨したところで三十年か五十年です。然し親の慈悲心はさう永くは辛榨し切れないでせう。こちらさへ何時までも辛榨し切るつもりで居れば、先様の方で辛榨し切れなくなつて來ます。

第一先が判つて居ます。極樂世界が待つて居て呉れます。淨土が待つて居て呉れます。如來様は大慈悲です。大慈悲が捨て、置く筈がありません。なつて慕ひ寄る子供をはねつけるやうな「慈悲心」と云ふものがあるでせうか。それは絶対にありません。

して見れば絶対安心ではありませんか。

こらしめのために親は子を叱るかも知れませんが、「お母様はもう構ひませんよ。お母様はもう他所へあなたを捨て、行つてしまひますよ」と云ふこともあるでせう。すると子供は一層悲しくなつてお母様にしがみつきます。かうなるともうお母様の方が負けてしまつていそいで

子供を抱き上げて頬ずりしてしまひます。

此の心状です。此の關係です。

如來様と私達との關係も之と同じです。

其處には親子の絶對の信があるだけです。

母親なくして子供は満足に育たないやうに、如來様なくして私達の

崇高な心は育ちません。

絶對の信の中にのみスクスクと生長します。

そして親の慈悲の中につゝまれて、明るく朗らかな氣持で、這ひ廻

つたり、いたづらをしたり、玩具をひねくり廻したりして居ます。

如來様から見たら、私達の生活もこんなものでせう。

信すればよいのです。信じて居ればよいのです。如來様の絶對の大

悲の光明に包まれて居ることを信じて居ればよいのです。

「如來様は決して見捨てない」

と云ふ確信の中に出來るだけの事をさせて頂けばよいのです。

時にはいけない事もするでせう。さうと氣がついたらあやまればよ

いのです。

「すみませんでした。許して下さい」

と念佛を以て懺悔すればよいのです。

そして「南無阿彌陀佛」と一層すがつて行くのです。すると如來様

の方ではすぐ抱き取つて下さいます。ほんとに有り難い事です。

悲しい時悲しければ悲しい程、如來様にすがります。

嬉しい時嬉しければ嬉しい程、如來様を讃美いたします。

視力經濟學

消費のある處、供給がなくてはならぬ。需要と供給のバランスを保つ處に、經濟の根底がある。

處で物資の供給は圓滑に行つてゐる今日でも、體力の供給は果して完全だらうか、否、むしろ消費一點張り、充分の供給が行はれて

ゐない事實がある。その最も顯著な一例が視力の問題である。

讀書だ、執務だ、創作だ、シネマだ、觀劇だと吾々は朝から夜中まで視力の濫費をやつてゐるが、眼に休養と手當を與へることは忘れ過ぎてゐる。結果は近視眼の續出であり、眼疾の流行となつて現はれてゐる。

視力を經濟的に消費することは眼への第一條件である。眼が疲れたら、充血を起したら、眼炎に犯されぬ裡に早速眼科藥スマイルを點眼する位の常識は何人にも要求したい處だ。其處に能率の躍進と生活の明朗性が生れる。

因に眼科藥スマイルの定價は二十五圓・四十五圓で全國藥店百貨店藥品部に販賣



如來様は絶對の愛を以て私達を見て居て下さいます。護つて居て下さいます。

だから苦しくても安心です。悲しくても安心です。

何もヂタバタ蕩擻く必要はありません。

「念佛衆生攝取不捨」

ほんとに有り難いことです。

然しそれは眺むる人にして初めて判ることです。

月はくまなく十方を照らして居りますが、下ばかり見つめて唯だ當面の事件そのものにのみ屈托して居ては、月の光のなつかしさは判りません。眺むる人にのみ眺むる人の心にのみ月の光の美しさが宿ります。

如來様の光は天地に充ちて居ります。見るもの聞くもの、皆な如來様の光でないものではありません。

雨のふるのも、日のさすのも、木々の葉が青々として居るのも、桔梗や萩の花が白く赤く紫に咲くのも、三度三度の食事、一枚の浴衣も、皆な其中に如來様の光明が充ち満ちてくまなく満たされて居るのですけれども、私達はたゞそれに氣がつかないだけなのです。

だから、一度思ひを格してそれに氣がつけばいいのです。

「月影のいたらぬ里はなけれども」

と氣がついたらいいのです。氣がついた時、もう既に眺めて居る人となつたのです。眺める人となつた時、月の光は其人の心に澄み渡るでせう。

信仰は決してむつかしいものではありません。唯だ氣がつくつかないかの相違です。

「オ、月が……」

と氣がついたら

「オ、如來の大慈悲よ」

と氣がついたら、それでもう立派な入信者なのです。

そして氣がつくには、下にばかり目をつけて居た其眼を上に向ければいいのです。

つまり私の心を「まことの心」になるやうにさせればいいのです。

法然上人の歌に

往生は世にやすけれど皆な人の

まことのこゝろなくてこそせぬ

と云ふのがあります。

誠の心になつた事、それは一切にかなふこゝろになつたことです。如來様の御旨にかなふやうになつたのです。孝順心になつたのです。素直になつたのです。天地に入れられる心になつたのです。

私なぞアトいくら生きるでもないと思つて居ます。だからせめては餘生を「まことの心」で如來様の御旨にかなふやうに生活したいもの

だと思つて居ます。

出来るだけ御國の爲になるやうに、出来るだけ社會の爲になるやうに、出来るだけ縁ある方々の幸福になるやうに念願して行きたいものだと思つて居ります。

私達は今世界の建直しの際に未曾有の非常時局に遭遇して居ります。思へばほんとに千載一遇の好期に恵まれて生れ合はして居るのだと思ひます。

此時此際、心から「我」を捨てた廣い大きい氣持になつて精進したいものです。

出来る出来ないは兎に角としても、さうした氣持で精進したいと念願して居ります。

それでなければ第一戦に身命を捧げて居られる皇軍將士に對してもほんとに申譯がたゝないと存じます。

清く明るい生活！

それは正しく信仰に依つてのみ本當に獲得せらるゝものだと思ひます。

「をばり」

阿彌陀佛と申すばかりをつとめにて

淨土の莊嚴見るぞうれしき

法然上人詠歌



戦地より 黒川 大道

暑熱一三〇度に餘る八熱地獄もかくやと許り思はれます。山西の奥地遠く暑中御伺ひの御挨拶を申し上げます。

佗しきは南瓜の花の残り咲き

向日草の大きくゆれて陽の盛る

御來光を拜する山に露縁

毎號「淨土」拜讀、感銘致してゐ

ます。兵隊さんにも回讀させて、

歩一步精神修養と新知識を與えて

ゐます。淨土宗としての動きを示

す無言の説示に非常に肩見の廣い

思ひを致してゐます。時節柄色々

の御計畫も眞に時宜に適したもので

有難い極みと存じます。徐州會

戦には黄河渡河地點にて參加、六

月下旬、再度山西に入つて鐵道修

理に當る事になりました。黄河畔

と異つて水清く、蛋・蚊・南京蟲

も少く、夜は大陸的涼氣を味つて

至極暮しい、日を送つてゐますか

ら御安心下さい。時局は益々重大行く處まで行きますが、何にいても前途の見通しは全く不明、凱旋どころか彌々出征者の多いと云ふ事で、眞に前途の多事を思つて憂國の念にたへません。身を教職に享け、雜誌報國の便宜を得られたもの、偏に國策指導の任に當らん底の慨を以て御活動下さいます事を祈念致します。目下の所、毎日南瓜と十六豆許りの給與、いささか閉口してゐます。林檎の走りも出ました。朝顔も夾竹桃も飄箆も向日草も今が花盛り、内地と少しも變りません。

「信仰讀本」で 下澤喜美子

信仰讀本を車中のつれづれに繙きましたところ、面白さについてこまめ讀破いたしました。一言一句泌々身にしみて些かながらも求道の生活に入つた身の體驗を心から感謝致しました。今の私の心境はたゞ「感謝の眞心で一杯です天地萬物に對してこのお禮心を如何に現してよいやら術を存じません。

銃後奉仕 不善 居士

銃後奉仕、白衣の勇士に法味を捧げる事は誠に有意義な事と存じます。益々拍車をかけて堅忍持久最後の五分間まで邁進して欲しいと存じます。私は商人です。必ず

賣れる賣つて見せる「かうした信念と信仰を本會の御指導に依て得ました。「戦へば必ず捷つ」智者のふるまひをせずたゞ一向に念佛申せば必ず現在に未來に莊嚴淨土を成就するを得「兎角よく聴き多く讀む中「惡戲術ことも捨て難し、唯念佛のくせをつくべし」信念も信仰も湧出る事と存じます。無始無終の御努力を切望致します。

銃後美談 深尾 靈賢

貴會愈々御隆昌の段、宗の爲に賀し奉ります。當支部もお蔭を以て會員一同精進致してゐますから御安心下さい。先般も申し上げました通り、當支部會員中にも勇躍征途に向はれ、戦火の地に活動されてゐる次第ですか、今回特に會員の家庭にて銃後美談とも申さるべき事件があります。即ち當支部會員である川崎未野嬢（大阪電話局員）の兄幸一氏は昨年八月應召以來片桐部隊本部付にて各地の戦闘に参加、武勳を表はされ、目下も健昌にて活躍致されてゐますが、出征家庭慰問を當村に於て舉行され、昨秋農繁期にも各村民は出征家庭の奉仕作業を致しました。川崎家は農業少き爲に勤勞奉仕の代償として村當局より全一封を贈られましたか、同家に於ては之を頂かれはしましたが、息子が名譽の

應召を受けた事は一家の譽であるからそのまゝ頂くに忍びずとし、國防献金か慰問献金かにしようと考えられてゐました。丁度その時皇軍の將兵の戦死者が多く、加ふるに去る七月二十六日、當時糧徒中にも三十六歳になる方が戦死されました。川崎家では之を知り、早速思ひ惱んでゐた金一封を戦死者の英靈追善菩提の爲に宿坊の寺へ永代祠堂金として志納し、年々盆施餓鬼に御回向を依頼するのが最良の處分法と考へられ、早速村より贈られた金一封に若干を加へて支那事變戦死病歿者英靈追善の爲の永代祠堂として志納せられました。誠に感心な行爲ですが、同家は中産以下の家庭で家族全部が夫々日々業務にはげんでゐる家で、貧者の一燈かとも思はれます。會員未野さんは十九歳の時、入信されて以來、熱心な念佛者となり、例月の集ひには勿論のこと、各地の念佛會には公務の餘暇をさいて出來得る限り參加せられてゐますが、これが川崎家全般に感化し、兩親及び姉も念佛を唱へられる様になり、今日では家族全部が信仰に入られてゐますが、この信仰の力がかゝる奇篤な行爲をなさしめたのだと深く感激してゐます。

編輯後記

◇土用の中が思ひの外涼しかつたせいか、残暑は仲々厳しいやうです。が、明暗の明かな日射はもう秋のおとずれを知らせてゐます。私共はこの夏は暑いと云ふ言葉は禁句にしましたが、皇軍將士の上にも一日も早く明朗な秋のおとずれを新つてやみません。

◇本號の巻頭には倉田百三氏が念佛の眞髓にふれた好個の隨筆を贈つて下さいました。トルストイの思想的苦惱から、念佛の信仰の問題に就いて説かれたところ、氏御自身の信仰の面目躍如たるものがあり、また稱名念佛の新鮮な時代的意義を示されて示教する處多大であります。

◇また、念佛部隊長として勇名をはせられ、本誌にも御紹介申し

た鷹森部隊長の言葉をまた本誌に掲げるの光榮を得ましたが、念佛と同部隊長との因縁は、皇軍の戦績の中に如何なる實を結んだことでありませうか、實戦の中に生きた念佛、それは如何なるものであつたでせうか。言々句々私共の胸をうちます。

◇「法然上人をめぐる人々」を本誌からまた引續き掲載いたします。法然上人の御姿は、上人に直參したその時代の人々の信仰の中に最も良く具體的に現はされております。これらの人々の姿を描きつゝ念佛の道につき進むことは格別意義深いことと信じます。

◇内省の秋、この時局下にあつて、處すべきわれ／＼の覺悟はどうであらうか、その基底となるべき信仰は？ この秋こそ一層念佛の道にいそしみ度いものです。

本誌廣告一手取扱

株式 正路喜社
會社

東京市京橋區銀座西七丁目
電話銀座代表 五七六六

◇本誌掲載の廣告は一切右の店で取扱つてをりますから、廣告掲載御希望の向は直接その方へ御問合せ願ひます。

◇本會出版物の御注文は振替郵便が御便利です。振替口座番號は東京八二一八七番

◇御注文の場合は種類、部數、代價を楷書で明瞭に御書き下さいますやう。尙送料をお忘れなき様願ひします。

◇勝手乍ら代金引換は一切お断り申上ます。

◇その他お問合せは往復はがきかまたは返信料同封で御願ひします。

浄土 九月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和十三年八月三十日印刷納本
昭和十三年九月一日發行

(定價十錢)

編輯兼 眞野 正順
發行人

印刷人 赤尾 光雄

東京市牛込區市谷加賀町一ノ二
印刷所 大日本印刷株式會社

發行所 法然上人續仰會

東京市芝區芝公園明照會館内
振替東京八二一八七番

「浄土」購讀規定

一部 定價 金十錢
(送料一錢)

一ケ年 金一圓
(送料不要)

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和十三年八月廿日印刷納本 昭和十三年九月一日發行

淨土第四卷第九號

定價金十錢（送料一錢）
滿鮮臺等外地定價金十一錢